

が自分は偉くなると思つた。だから醫書をよむ暇々には俳書を切りによんだ。醫者の宗洪はそのことを知つて、度々戒めてくれたが、馬琴の志は遂に屈することが出来ないで、とうとう兄の家に戻つた。

然しその時分坊主頭になつて寺にも居ず、醫者の家にも居なければ、何か申譯の立たない悪い事をしたのだと世間では思つて居たので、グリ／＼坊主で戻つて來た馬琴は兄の家で置かれず困り果て、居た。母も大變に心配して居た。

ところが伯母(母の姉)が馬琴を可愛がつてくれて、その家に毛ののびるまで御世話になることになつた。伯母は馬琴を虐めないで、その中分別も出来ることと思ひ、なすがまゝに任せて置いた。馬琴はその時分一心に勉強することが出来て、伯母の持つて居た淨瑠璃本、伯父の持つて居た太平記によみふけり、また兄から借りた俳諧七部集と方丈記を寫し、その他いろ／＼なものを読んだ。それから俳諧師になるには文字がよく書けないとよくないことだと思ひ、一心不亂に習字の練習をして筆蹟が大變に上つた。

馬琴の居た隣家に、馬琴よりは三つ年上の息子が居て、その自分國學者の加藤千蔭の門に入り勉強して居たので、その人と交際をしていよく教はつて居たが、何時の間にか馬琴はその息子よりも學問といひ、筆蹟といひ、ずつと偉いといふ評判になつた。そこで馬琴はこ

鴨長明の著書

れ位のことと評判になるなら、自分はどれだけ偉くなるやら分らない。一心に勉強して偉くならうと秘かに決心した。

十七になると髪がのびたので、祖母の家に暇乞して戻り、或る武士の家に仕へることになつた。

十八になつた年、大變米の値段が高くなつて、江戸には大騒動が起り、世の中が今にも滅びはせぬかと、皆が安い心もなかつた。その年長兄の羅文は甲府に在勤するとなつたが、母は病身だつた。で羅文は母をよく／＼慰め、留守中は養子に行つて居る弟の清次郎にも頼んで居るし、また伯母様にも時々來て貰ふやうに頼んで居るし、姉のお蘭は十六、お菊は十三になつて家事から介抱まで申上るからとて立出でた。

長兄が留守中、清次郎は度々養子先から見廻りに來て、留守中の用事してをやつた。羅文は折々母に葡萄などを送つて喜ばせた。母は長女が年頃になつたので、自分の手傳ひ介抱ばかりさせて置くのはよくないと思ひ、戸田家の奥方へ宮仕へに出した。馬琴の兄は二人とも母思ひで、よく孝養をつくしたが、馬琴は少し風變りであつた。しかし、兄弟仲は大變によかつた。

ところがその後、母は病が重くなつたので、長兄の羅文は仕へを辭して江戸の家に歸つて

来た。男兄弟三人、女の兄が二人、凡て五人の子供は一心に母の看護をしたが、母は五人の兄の顔を眺め、

「これからは皆、左馬(羅文)をお父さんと思つてお出でよ。誰でも左馬に心配をかけてはなりませぬ」といつて亡くなられた。

馬琴が二十になつた時、妹の蘭は縁組になつたので、三人の兄たちが心から祝つてやつたけれどもその後間もなく馬琴の小兄は亡くなつたので、兄弟は大變に悲しんだ。その時のことを馬琴も羅文も文章に書いて居る。

それから三四年の間馬琴は、一更立身を願うて居たが、仕事は無し、兄は妻を迎へたので寄食するわけには行かず、二十四歳の折壬生狂言といふのを作つて出版しようとしたが、初めての人易に出版も出来ないし、よしよい物が出来ても、自分の方から本屋に金を出さねば、出版はしてくれなかつた。

その頃、京橋銀座に京傳といふ名高い小説家が居たので、馬琴はその人を尋ねて行つて「こんなものを書きましたから、御覽頂きたい」として原稿を出した。京傳は

「狂言など書いたつて、とても飯は食へないから、何かしつかりした仕事をした方がよからう」といつて、馬琴をつつく眺め、その原稿をとつて見て居たが、

「初めての作としてはよく出来て居る。出版したければ、紹介してあげよう。こちらから金を出して頼むにも及ぶまい」といつた。

馬琴は大變喜んで「それでは序文を書いて下さいとか、京傳門人といふ名で出さして下さい」とかいつて頼んだが、京傳はそれには及ぶまいといつた。けれども馬琴は強ひて門人の名を買つて、芝の和泉屋といふ本屋に出版の相談をしたらば、此の本屋は京傳のものを出したいと常に思つて稿本を得ることが出来ないで居つたことゝて、京傳の門人ならばとて出版してやつた。

馬琴は大變喜んだが、さて本になつて店に出たけれども四百冊位しか買れないで、大した評判にもならなかつたので、一時は落膽して外に身を立てる仕事を探さうと思つたけれどもまた思ひ改め、今度は京都大阪の方へ行つて成出でようと思ひ、少しばかりの旅費を持つて神奈川まで来た。すると神奈川某寺で法師が病氣で寺子を教へられないので、その代りを求めるといふ廣告があつたので、馬琴はそこに止まり、春から夏まで寺子を教へて過した。

その年の九月深川洲崎に海嘯があつたので、かたゞ馬琴は江戸に舞戻つたが、さうとて兄をたよつて行くわけには行かず、神奈川に立戻るわけにも行かず、途方に暮れて永代橋際の宿屋に泊つた。するとこゝでの噂に京傳が或る本を書いて手鎖五十日の刑に處せられたこ

四百冊では
損になる。

報恩の精神
が立身のも
と。

とを聞き、明くる日早速銀座の京傳方へ見舞に行つた。京傳は手鎖のまゝ家に閉ぢ籠つて居たから、此の節は人も遠慮して餘り訪ねてくれないので、大變喜んで馬琴を請じ入れ、

「その後何をして居たか」と尋ねた。

馬琴はその後の成行を語ると、京傳が自分の代作をしてくれては何うだと相談した。それは何よりも幸ひだと思つた馬琴は京傳の頼みに應じ、それから京傳方の二階に立こもつて物語を書いた。

馬琴が代作をして居ることを知つて居たのは、蔦屋といふ本屋ばかりだつたが、蔦屋は馬琴と同じ二階住ひならば私方に來て下すつた方が萬事都合がよいし、二階も廣くて、讀む本も澤山あるから」として自宅へ來るやうに頼んだので、馬琴は日本橋通油町の蔦屋に行くことにした。

それから馬琴は様々な物語を出版して、二十七の年になつた。この年に結婚して家をなし三人の兒が續いて産れるやら、妻の母がなくなるやら、長兄羅文が死ぬるやらして、大變事多かつた中にも毎年五六種の本を書いた。然し思ふやうに立派なもの出来なかつた。

年四十になつて馬琴は弓張月を出して、非常に名高くなつた。その時分世間の名高い文人は、皆早熟て終つたが、眞面目な馬琴は年とつて益々力を得、あまりの勉強に終には盲目と

盲目にも大き
な天分があ
る。

雅號とは何ぞ
や。

兒童の個性及
天才に對して
家族が與ふる
壓迫に耐えざ
る精神を強く
すべし。

なつたが、それでも八犬傳といふ大きな物語本を書いて、日本歴史上の大小説家となり、今でも多くの人々が馬琴の書いたものを面白がつて讀んで居る。

逸見一信

逸見一信は江戸時代の名高い畫家で、顯齋といふ雅號をもつて居た、東京深川の或る商賣人の息子にうまれ、小さな時から畫が大變好きであつた。けれども師匠につかないで、只一人で繪を書いた。

ところが、一信には兄があつて、一信を可愛がつてくれず、「商賣人の息子が繪ばかり書いて何になるんだい。さつさと出て來て使に行け、店先に坐つて居れ！」と始終叱りつけて居た。けれども生れつき好きなことは止められないもので、どんなに叱られても、一信は偉い繪書にならうと思ひ込んで居た。

ところが一信が二十二歳になつた時、兄は益々よろこばないで、元日早々箒をふりあげ、「この野郎、何をしやがる」として一信をなぐりつけた。

一信はむつと憤り、

「よろしい。擲られた。わたしは悪いことをして居ねえ。これ程までにして辛抱して悪いとならば、致方がねえ。わたしはもう家には歸らぬ」といつてそのまゝ兄に別れ、家を出てそ

信の畫は少しも人真似をしたところがなく、全く自分の精神と天才とをあらはしたものであつた。

私共は貧しい家に生まれ、よい學校に入つて出世が出来なくても、心掛一つでは、學校へ入つた人よりも反つて立身出世をすることがある。志を高くして、一心に奮勵しなければなりません。

越後屋

丁稚奉公の精神を鼓火し、忍耐勤勉細心の教訓を施す。

これは江戸時代の話でありますが、今でもそんな例が實業界にはいくらかもあるので、お話をします。

越後屋といへば、六七百人の男をかへた大きな商店で、その主人を八郎右衛門というて居た。

八郎右衛門は子供の時分、田舎から江戸にいつて、丁稚奉公をして居た。丁稚奉公をして居る時には、昔でも今でも同じであるが、よく立廻つて、小さなことにもよく注意して居らねばならぬ。この修業が出来ないと、他日番頭になり、進んで店主となつてから、自分で商賣上の仕事を切りまはす時に腕がないから、成功をしない。

さて八郎右衛門は、丁稚になつて奴僕のやうに使はれて居た。或る日の事番頭につれられ

吃られて意地を奮起する精神。

紀元一五六四
没生一六一六
ウエニス人の復習をした後、これを授け、社会より直接受くる事を知らしめる。

て、或る人の家に行つたが、番頭はなか／＼用談がしまへないで、もう、とうくに畫がすぎ腹がすいて堪らなかつたもので、大ふく餅二つ程買つて食べた。すると丁度まだ食べて居るところに、番頭が出て来てそれを見て、大變に叱つた。

それから八郎右衛門は、大變それを耻ぢ、どんなことがあつても買食はしまひ、そして人よりも、うんと働いてやらうとの志を立て、せつせと働き、初め家を出る時父から貰つた三兩の金を一錢も費はずに貯金して居た。

斯うして働いた彼は、主人の目にとまつて、一番よい番頭に引立てられ、遂に江戸の主人となつて、六七百の雇人を使ふ程の大仕事を切り通して大繁昌をしたのである。

セキスピアー

セキスピアーは今から三百年ばかりも前の人で、英國に産れた世界で名高い文學者です。

セキスピアーは、世界の何處の人でも多少學問のある人は、知らない者がないといふ位に名高い人で、その人の書いた面白い又は悲しい感心すべき劇は、今でも大學で専門に教へる先生がわざわざ英國から聘してあるといふ位です。そしてその劇はよく日本でも芝居にします芝居といへば、日本では昔からいやしめて居たが、西洋ではさうでなく、政府が劇場をたて、國民のために芝居をやつて居ます。よい芝居は大變人のためになるからです。

さて、その名高いセクスピアは、大變貧乏な家にうまれて、少しも學校では勉強することが出来ませんでした。セクスピアのお父さんは牛殺しをやつて居たといふ事でもあり、また羊の番人であつたといふ事です。でセクスピアは子供の時分には、羊の毛を揃へて少しばかりの賃金を貰つて居たこともあり、又船頭になつて船をこいだこともあり、小販賣人となつたこともあり、村の學校に雇はれたこともありましたが後には非常に名高い文學者になつて劇を書きました。セクスピアは學校に入つたり、先生から教はつたりする事はなかつたが、何の仕事をして居る時でも、よく世間のことを覺えたので、それが大變な學問となつて、まらいい人を感心させるやうになつたのです。どんな仕事でも學問です。私共は何事をもよく覺えて行かねばなりません。

衛生

其の一

世の中には何百とも數限りのない病氣があります。その中には、激しい傳染性をもつたものがあつて、半日も経たない内に人の生命をとるものもあれば、何年何十年となく身體につきまといつて一生涯人を苦しめるものもある。重くなくても病氣があれば、思つたやうに働く

教授指針

震内一致の
力健な生活
のが主眼

ロムプロゾ
は伊太利の犯
罪學者

ことが出来ず従つて立身が出来ない。身體の弱い人は、氣が引け込んでさつと人にまける。おまけに自分も苦しかつたり、悲しかつたりする、弱い人は丈夫な人よりも十倍も百倍も、苦しがつたり、悲しがつたりする。少しのことに苦しがつたり、悲しがつたりする人は、決して偉くはなれない。そんな人には忍耐力がない。自立自營の精神がない。堅固な精神がない。進取の氣象がない。自分の身一つにもおまして居るから、人をあはれみ、慈善の行をすることが出来かねる。身體の弱いことは、何から云つても損である。それに又人に迷惑をかけるから、世間に對しては不道德であり、親に對しては不孝になる。

そればかりで無い。物覚えが悪かつたり、悪いことを考へたり、不道德なことをする人は皆病的である。ロムプロゾといふ學者は、悪いことをする者は、皆病入だといつて居られる。それはさうだらう。身體の丈夫な人は精神も丈夫だから、いろんな禍があつたり貧乏したりすると奮起して働いたり、立身したりするが、身體も弱く心も弱い人は、充分に働くことが出来ないで、つひ悪い考を起さなければならなくなる。

だから私共は身體を丈夫にすることが甚だ大切である。身體は子供の時分から丈夫にしなといけない。薬ばかり飲んで居る人は丈夫にはなれない。病氣すれば、お醫者があり薬があるから、何時でも治ると思ふのは大變な間違ひである。醫者の薬といふものは、必ず何の

病氣でも治すことが出来るといふものではない。

で私共は身體を丈夫にするには、丈夫な精神を有つ事と、衛生を守ることが大切である。丈夫で正しい精神があれば、病氣はするものでないといふことは昔から、偉い人々が教へて下さつたことである。どんなに用心をして衛生を守つても、病氣に罹る。その人は精神が弱く、また正しくないからである。精神を丈夫にし、心が正しければ、醫者の薬を用ゐなくても、重い病氣が治る例は澤山にある。昔聖者といはれた釋迦や基督は、薬をもらないうで、いろ／＼な重病を治された。今でも靜座とか、氣合とかで醫者の見棄てた重病人を治す人は澤山にある。又信仰のある人が、驚くやうな力で病人を治すことがある。これ靜座をすれば、心が正しく、また氣合や信仰は精神が丈夫になるからである。精神が丈夫で、心が正しい人は、何時でも力に張りがあり、油斷がないから、外氣にまけず、微菌に犯されない。「病氣といふものは無いものだ。病氣があると思ふから病氣に罹るものだ」といふ人々がある。それをクリスチャン、サイエンスといつて、米國では大變盛んに信ぜられ、いろ／＼な病氣を治して居る。

けれども、不攝生なことをすれば、力に張がなくなり、精神がよわる。又悪いことを考へたり行つたりすると、心が歪み、信念がなくなつて力が弱くなるから、従つて病氣にかゝり

やすくなる。

病氣は皆弱い精神不正直な心、不攝生から起つたものである。人間が悪いことをすると、病氣が大變流行するが、これは實に不思議である。それは迷信ぢやなくて、事實である。今度世界戦争があつたら、世界中にスペイン風邪といふのが流行して、澤山な人が死んだ。實に不思議である。

で、丈夫な人になるには、また善い人にならなければならぬ。よい人は昔から皆攝生を守つた。不攝生な人で善い人はない。

でこれから攝生といふことについて大切なことをお話しします。

一、飲食物。大抵な病氣は腹から始まります。風を引きやすい人がいろ／＼な病氣をつくるといひますが、風を引きやすい人は胃や腸の弱い人に多い。だから、私どもは胃や腸を大切にしなければならぬ。座禪や靜座では、下腹で息をして、下腹を鐵のやうに丈夫にする。そして凡ての病氣を治してしまふ。それ程胃腸といふものは全身を丈夫にするに大切なものである。胃腸が弱いと、頭も弱くなる、氣も弱くなる。元氣よく活潑にして居れないでいつも不愉快である。

胃腸を強くするには第一飲食物に注意をしなければなりません。餘りうまい肉類や、菓子

プラトンは十四歳までは肉を禁じ

たし、つし
供に肉食の
實を設いて
居る。教育
文學十講參
照

を食ひ過ぎることはよくありません。始終何か食うて腹かはつて居るのはよくありません。そんな人はよく下痢をしたり、便通がわるくなつたりします。腹の中がいつでも一ぱいになつて居ると、血が腹に集まつて居るから、氣が重くて物覺えがわるくなります。馬鹿の大食といつて、馬鹿は無暗に澤山たべますから、智慧が働かなくなつて馬鹿になるのです。昔から非常に偉くなつたり、聖人といはれたりした人は、飢えかけたことが度々あります。わざと何もたべないで飢えた人々もあります。孟子といふ聖人は、「天が人を選んで偉いことをさせるには、先づその人を苦しめ、その人を飢えさせる」というて居られます。金持の息子が墮落しますのは、食へられないといふ心配がなく、食ひ放題によいものを澤山食へて飽くことがないからであります。又金持の息子が身體の弱いのも、子供の時から餘りよいものばかりを澤山たべて、吾がまゝになるからであります。

だから私共は働いて腹が大變すいた時などは別として、大抵は程よく食べて居なければならぬ。餘り食へすぎて、腹がはち切れるやうだと、學校に來ても、ねむたくなつて、勉強するのが一向面白くないやうになります。

二、運動。衛生上にまた大切なことは活潑な運動と労働であります。朝起きたら、家の掃除を加勢することは大變身體によいのです。また學校から歸つても、家が農家であれば、農

姿勢と精神
とは根本的
な關係を有
する。

業の手傳ひ、農家でなくてもいろいろな手傳ひがある。手足を動かして、さういふ仕事をすることは大變身體のためになる。

労働をいやがる人は、學問をしても、その學問に値うちがなくなる。

それから運動が大切。人々と一緒に力を合せ、一致協力してよく運動をすること、活潑に運動することは、今更にはなくても大變大切です。

三、姿勢。身體の姿勢を正しくすることは大變健康に大事なことです。身體の形が歪んで居る人には大抵病氣があつたり、身體が弱かつたりするものです。身體は全部が立派に調和がとれて居なければならぬ。身體は相撲取のやうに大きくなるのが大切ではなくて、綺麗に調和がとれて、姿勢のよいことが大切であります。で身體を真直にして歩むこと、身體を真直にして坐ることに氣をつけて居なければなりません。あの靜座では、姿勢を正しくすることを矢筈しくいひます。昔の言葉に襟を正しくして、端座すといふことがあります。これは着物を正しく着、襟を真直にして真直に坐つて居るといふことです。着物の着方がだらしない、身體もだらしないとなつて、従つて心もだらしない、遂に身體をこはします。

四、日光と空氣。日の光のささない家の中にはかり閉ぢ籠つて居ると弱くなる。煤煙をすひ、塵埃を吸ひ、炭坑の穴の中ばかりで日も夜も働かねばならぬ職工や、鑛夫は肺病になり

やすくて早死する。どこの工場に行つても、人殺してもさうな丈夫な男がコロリ／＼病氣をする。それは日光と空氣の中に十分楽しい呼吸をすることが出来ないからである。

て私共はよく戸外で遊びまた郊外や田舎に散歩したり、山に登つたりすることが大切である。山が無ければ海、海もなければ野原や森によく散歩や遠足をするがよい。特に都會に生れた人は、電車賃を出せば直ぐ郊外に出られるから、日曜の日なんかは一人でもよい、可成遠くに遠足する習慣を養つたがよい。遠足するには金を携へることはよくない。辨當を携へて、自分の見知らない遠い處に行くことは、健康の爲ばかりではなく、知識を擴め、氣宇を高遠にするために大切である。孟子は浩然の氣を養へといはれた。山にのぼり、廣い野原を歩み、大海原を望む、少年の心には何か偉大な力と望みが湧いて来る。天地のやうに大きい限りない感じがして来る。私共はさういふ氣宇を養つて行かなければならない。何ともいひ様のない大きい高い限りない感じを抱くことが、浩然の氣を養ふといふ大變大切なことである。

五、清潔。身體を清潔にすること。衣服を清潔にすること。家の内を清潔にすること。家の周圍を清潔にすることは、身體の健康上大切であるばかりではなく、また心を清くするに

大切なことです。

あなた方は、自分で、自分の身體を先づ、綺麗になさい。着物の下も、手足も、耳、鼻の下、口の中、頭すべて綺麗に洗ひなさい。汚れて居ると氣持が悪いはかりではなく、きたない皮膚病が出来たり、皮膚の毛穴がふさがつたりして、氣持がわるく、それがまたいろいろな病氣をひき起します。

諸君の家が汚ないならば、母上や姉上などの手にばかり托さないで、自ら朝晩力を出して立派に掃除しなさい。これから先の世の中で立身しようとならば、學校で勉強するばかりでは駄目です。あなた方は家に居ようと、商店の丁稚にならうと、人の世話にならうと、何時でも綺麗に掃除する心掛がなかつたら、どんなよいことでも出来ませぬ。特に人に使はれる身となつたら、掃除をよくしないと人に信用されず、信用されない人は立身させぬ。近來は、大富豪の息子さんが、丁稚にやられ、普通の小僧と一緒に働いて居る例が多いのです。さういふ人はきつとエラクなります。又エラクなつた例がいくらもあります。

六、以上は皆大切なことですが、貝原益軒先生の養生訓から二件ほど大切なことをここに示します。

(イ) 言語。言語をつゝしみて、無用の言をはぶき、言を少くすべし。多く言語すれば、心氣

のぼせは腹に力がなからず、
證の弱い身

へりて、又氣のぼる。甚だ元氣をそこなふ。言語をつゝしむも亦徳をやしなひ、身をやしなふ道なり。(養生訓)
口唾液は一身のうるほひなり。をしみて吐くべからず。特に遠くつばきを吐くべからず。氣をへらすなり。(養生訓)

其の二

實内一致の健康法を徹
させる

一、人の精神は、身體の中に入つて居ると思ふのは間違ひです。精神は身體で、身體が精神です。だから、身體が丈夫で、どんなことにでも元氣よく耐へ得る人でないと、丈夫な精神をもつた人ではありませぬ。また精神がよわくては、身體もよわいのです。
西洋で、臭ニホのことを研究した學者があります。花にそれ／＼臭ひのあるやうに、人間にも一人々々それぞれの臭ひがあるといふことです。その學者のいつた事から一二例あげて見ますと、泥棒は酔よばい臭ひがし、吝嗇奴は、鼠の臭ひがするといふことです。また此頃、西洋の方ではよくやつて居ますし、日本でもほんの少しばかりやつて居ることですが、銀行や警察では犬を使ひます。犬はよく物を嗅ぎつけるものですから、泥棒や、いろ／＼な罪人をつかまします。犬がかぎつけるといふことです。犬はこの奴は變ないやな臭ひがすると思つたら吼うえつきます。それを見ても、精神と身體が同じものであるといふ一例になりませう。

それと同じで精神的に健康でない人は、行が正しからず、また身體がどこか悪いが、身體の形がゆがんで居るかするものです。今度はそれと反對に身體が悪くても、行が正しからず、従つて精神も健康ではないのです。一例をあげますと、癲癇といふ病氣のある人は、時々非常に偉いことをするが、又非常に悪いことをするものです。で癲癇病者は、多く泥棒か人殺しか火つけかする人間だといふことになつて居ます。

だから私どもは常によい心掛をもつて居なければならぬ。善を行ふには、極めて大膽でなくてはならぬ。善いことの爲に大膽でない人は、身體も極めて丈夫ではない、のらくら者は精神も身體も隋弱な人間です。私共は心身に剛健でなくてはならないのです。親鸞上人様は、本願力がなくてはならぬといはれました。本願力のある人ほど精神の正しく強い人はありません。本願力のある人の前には天神地祇も敬伏し、魔界外道も犯すことが出来ないと親鸞上人はいうて居られますが、これはほんとうです。

私共は一つの良いことをしたからとて、善人になるのではない。本願力を有つた勇ましい人が善人なのです。善には限りがありません。だから私共は、常によい正しい心掛をもち、又自分に工夫して善いと思つたことをば一心に實行して行かなければなりません。こういう人には、病氣も仲々とりつかないのです。

本願力とは
眞剣な眞心は
だといふ位
に教へて置

それと共に、皆さんは自分の身體を鍛えなさい。すると愉快になります。鬼でも攻めひしぐやうな鍛えられた身體をもつて居なければなりません。ソクラテスといふ希臘の聖人は、大變身體を鍛えられました。雪の中に一夜立つて居ても、三日や四日食はなくても、平氣で居られる様な身體を持つて、様々な苦しいことに人十倍耐へ忍ばれたのです。あなた方は食ひたい食ひたいといふよりも、耐へ忍び、打克ちたいといふ心掛を始終有つて居なければなりません。人間は習慣といふものが大變おそろしいものです。よくない考へをもつことが習慣になると、それから出られなくなつて、身體をも精神をも腐らし、弱くしてしまひます。

よい心掛を持つて、あなた方は、自分の身體を清くすることに心掛て居なければなりません。身體の純潔を失つて、汚れた毒を身にうけ、病氣を發した者には、その病毒が廻つて、鼻をくやししたり、頭腦に蟲が喰ひ込んで馬鹿になつたり、骨の中に蟲が喰ひ込んで、全身の痛みに堪へられず、腰も立たなくなつた者が澤山あります。

二、病氣を有すると、矢鱈に滋養物をとるといつて、よい御馳走を澤山食へるものがありますが、これは間違です。病氣して身體が弱つて居ると、よいものを食へても、その養分を身體が吸ひとる力に乏しいですから、何もさゝめはありません。昔から日本では病氣をする時、お粥に梅干を少し食へるといふことがありましたが、それは養生に叶つたことです。こ

の頃は粗食や斷食療法といふことが一部に唱へられ、病氣したら、肉類を禁じ或は斷食したが一番よいといふのです。特に腹をこはした時に、よく物を食へたり、脂肪性のものを食へたりすると、腹は益々わるくなります。

昔希臘の國といへば、世界初まつて以來、一番體格のよい顔の綺麗な人の居つた國です。こゝでは、人が不攝生のため病氣をしたら誰も構つてやらぬといふ規則が出来て居ました。それ程不攝生といふことは悪いことです。

又希臘では十四歳までは、子供は肉類を食へてならぬといふことになつて居ました。平常に於ても、御馳走を食へなくても、身體は健康だといふことはそれでも分ります。

特に五六十年前から、肉食主義といふことが、西洋の方で初まりまして、肉食は攝生上大變よいといふことを書物に書いた學者もあり、またあの名高いトルストイといふ人は實際自分にも肉食をして八十幾つまで長生して居ました。昔から聖者といはれた人の多くは肉食でした。此の頃はアメリカには野菜ばかりしか出さない宿屋も出来て居るといふことです。

* * * * *

子供の時分には、何か御馳走がないと、不平をいふ者がある。さういふ人は、よく働きよく運動して、お腹がすかないからである。食べ物の不平をいふ人の腹は、いつでも大きいのであるから、何か旨いものでないと承知が出来ないのであつて、さういふ人は身體の血のめぐりがわるく、頭の働きがわるくて、よく物を覺えず、従つて元氣もわるく、心掛もよくありません。

潔白

大雅堂と稻荷大明神の寶物

徳川末代
大雅堂の正直にして廉潔であり且つ熱心であつたことを傳ふる。

池大雅堂は京都の人で、繪と書で名高い人であつた。大雅堂はその頃、有名な美人の百合子といふ女の一人娘なる、これも有名な玉蘭女史を妻に貰つた人である。百合子は大變有名な美人であつたばかりではなく、また歌をよくし、貞節正しい女で、夫と別れてからは、京都の祇園に風流な茶亭を出し、その時まだ赤ん坊であつた娘玉蘭を抱いて、獨立の生活をして居た。大變美しくよい女であつたから、人々から結婚を申し込まれたけれども貞節を守つて行かず、玉蘭を可愛がつて育てた。玉蘭もまた愛らしく育つて、大變賢い女になつた。その玉蘭もまたよいところから結婚の申込があつたけれども、母の百合

子は金錢や地位を目あてにして娘を妻はさなかつた。そしてその頃まだ名もない貧乏書生であつた池大雅堂にその娘を妻はした。

大雅堂はその後大變有名な人になつたけれども、繪や書で生活する人であつたから、何時も家は貧しかつた。しかしどんなに貧乏して食べるものがなくなつても、大雅堂は平氣であつたし、玉蘭女史も汚ない着物を着て少しも耻かしながら、常に喜んで大雅堂と睦まじく暮して居たから誰しも感心しないものはなかつた。

或る時の事、京都東山の稻荷神社の祭が近まつたので、大雅堂に大幟に字をかくことを頼んだ。大雅堂は承知して書いてやることにし、すぐに神社内に行つた。その幟は幅五反で、長さ二丈もある大幟であつた。大雅堂は幟を擧げて暫らく何か考へて居たが、漸く筆に墨を染めて、僅かに一字だけを書いた。頼んだ人達は、第二番目にどんな字を書くことかと待つて居つたらば、大雅堂は何故か突然筆を擱いて、

「書き賃はどれだけ下さるか？」と尋ねた。

頼んだ人達は、もう已に頼んで一字書いて貰つたことであるから、先方の望み通りにやらないわけには行かない。そこで、

「仰せに従ひ、どれだけでも差上ませう」というた。

そこで大雅堂は、「それでは百兩申受けない。でなければ書かない」といつた。仕方がないから頼んだ人達は承知した。大雅堂は大變喜んで、すぐにまた筆をとり、書き終つて百兩の金を貰ひ、そこへ出て行つた。

大雅堂が歸つて後、頼んだ人々は、皆口を合せて、「大雅は賤しい奴だ。一字書いて、百兩くれなければもう書かないなんて、實に賤しい奴だ。こんな汚ららしい幟は、大明神様に奉納してはならぬ」といつて大に怒り、將にこれを引裂かうとして居た。

その折しも大雅が大急ぎでやつて来て、

「私は昨日、三條通りを歩いて居たらば、不圖、一軒の骨董店に茶籠の古るもの、並べてあつたのを見たから、珍らしいと思つて買はうと思つて値段を聞いたらば、百兩だといつた私は欲しくてならなかつたが、貧乏で百兩は愚か、明日食べる米さへない、で止むを得ず買ふことが出来ないで居たが、欲しくてくならなかつた。ところが幸ひ今日、あなた達から幟に書くことを頼まれたから、いゝことだと思つて、思ひきつて、あなた達に百兩仕拂つてくれと相談した。あなた達は快く出して下さつた。そこで私は早速骨董店に行つて、買つてくれと申しましたら、主人がいふには、遂先刻一人の老人がその古籠を買つて行かれました。たつた一足違ひのことと誠に残念でした。私はそれを聞いて呆然してしまつた。私が、あな

た達から百兩貰つたのはその古籠の買ひたさばかりであつた。もう其の古籠は手に入らないから、貰つたこの百兩も私には用がない。で返さしようと思つて早速返へしに來ました」といつた。

それを聞いて頼んだ人達は、なる程と思つて、大雅の正直潔白なのに大變感心し、いらなといふのを無理に大雅の懐にその百兩を押しこんでやつた。

さて、大雅の書いた幟は、稻荷神社の前に樹てられた。するとその事が遠近に知れ渡つて、その幟を見ようとして續々社前に集まつて來た。大雅は餘儀なく百兩を貰つたものゝ、何だか心苦しいので、これを稻荷神社のために使用せむと思ひ、着物を着かへて田舎漢に化け、稻荷神社の幟下に集まる見物人の中に混り、見物人の評判を聞いて居た。すると何の字は少し小さ過ぎて、何の字は少し太すぎる。何の字は曲つて居る。何の字は筆力が弱いなど、いろ／＼云ひ合つて居た。

大雅は一々これ聞き、「なる程」と思つて、もと／＼通りの廣い幟を自分で新調して、それに書き直し、前日の幟を引き裂いて、新らしいのを樹て代へた。けれども見物人はその日もいくらか、非難をして居たから、大雅はまた大幟を新調して書き直した。斯うして四五度書きかへて、最後には大雅もこれならば大丈夫と思つて樹てたら、今後は皆が大變感心

して、一人だつて悪くいふものはなかつた。
けれども四五度も斯うして書き直したので、百兩の金は皆無くなつて、後には一文も残らなかつた。

そして其の一番お終ひに書いた幟は、今尙ほ稻荷神社の寶物として、社庫に珍藏してある相である。

これは山路愛山氏の話。

海舟と鑄物師

明治になる前、大名から鐵砲大砲の鑄立てを仰せつけられると、鑄物師は大變に儲かるので大喜びをして、注文主にペコ／＼して、いろんなものを持つて行つて居た。

或る時、勝海舟が幕府の命をうけ大砲の鑄立てを頼んだら、鑄物師がやつて来て、

「これは御造酒代で御座います。今あなたから御用を仰付かりまして鐵砲を拵へますに就いて、仕事が無事に終りますやう、お祝ひのためお神酒を差上るので御座います。外の先生方も、私共に御用を御申付になつた方は、皆貰つて下さいますので、どうか先生もおとり下さい」といつて、金五百兩を差出した。

ところが海舟は、決してそれを受取らないで、大層鑄物師を叱りつけ、

「お前はさういふものをよこしてはいかぬ。私にそんな金をくれないで、此の金で鐵その外

の分量を澤山にして、重味を増し、さうしてよい大砲を造つてくれ。勝がつくつた大砲で御座るといつて、頼まれた主人に出した大砲が役に立たないことになる、あれの名が折れるから、どうか、俺の名を落さないやうにしてくれ。そんな物はいらぬ」ときびしく申付けたものですから、鑄物師も閉口して引込でしまつたとの事である。

眞劍勝負

海舟の學生時代

人は何時どんな危険に遭ふやら分りません。何時どんな禍に陥らうとも分りません。思ひがけない危険や禍に陥つたら、とても理窟ぢやいけない。どんなに智慧を廻しても助からぬ時は助からない。その時には只眞劍になるより外はない。人間が眞劍になるときは、實に思ひもよらぬことが起つて、己が身を助け、また人を助けることが出来るのです。昔でも今でも偉い人は皆眞劍になつた人です。猫が鼠をとる時には眞劍です。人が金儲けをしようとするには眞劍でなくてはならない。凡ての大きな事業は皆眞劍でやつたものです。眞劍でない者は相撲をとつても勝たない。眞劍でない國民は戦ひしても決して勝つものでない。

安政の秋でした。この時分徳川幕府は、和蘭の航海師を雇つて、傳習生に航海術を教へさ

教授指針

書物と實際は往々にして違ふこと、危険に遭つた時は眞劍より外に道のないこと、成功の一大秘訣は眞劍にあることを示す。

大政奉還の時分、海舟と西郷との話を復習す。

して居た。あの有名な、勝海舟さんは此の時分傳習生で、稽古をして居ました。或る時のこと、三日の休日があつたので、勝さんは、コットル型といふ小さな舟にのつて、傳習生ばかりで、航海をやつて見ようと思ひまして、そのことを教師にいひました。

教師は、「何分秋のことで、日本の海岸は天氣が變りやすいから、風でも出たら大變だな。まだあなたの方の腕前では、風を凌いで乗切ることとはとても出来ない。であなた達達ばかりでやつて見るなら、秋が過ぎてからにしたらよからう」といひました。

「何私どもは海軍に従事して、その役目を申付かつて居ますから、海の中で死ぬる位な覺悟をして居ないと、修業になりません。でどうかやらして下さい」として勝さんは改めて許しを求めた。すると教師は、

「ぢや仕方がないから、行つて御覽。然し陸から十數里も向ふの方へ行くと、危いから行かないやうにして用心をして貰はんとなりません」といひました。

で勝さんは十二三名の者と一緒にコットル型の小船に帆をあげ、長崎から五島の方へ向けて舟を出しました。初めの程は風向きもよくて、具合よく舟が進んだから、書物で習つたとほりに舟をあやつることが出来た。これはよい按排だと思つて、ずん／＼舟を進めて居ると西南の方から黒雲が出て來ました。おやと思つて居る中に、黒雲は天一ぱいに擴がり、ゴロ

／＼と雷鳴がなりはためいて、ザー／＼と大雨が降り出し、おそろしい暴風雨になつたので舟は木の葉の波に揺られるやうに、今にも轉覆して、海の底に沈まうとするのでした。皆必死となつて、帆をおろすやら何かして騒いだけれども、まだ實地に腕のない仲間のことゝて手のつけようがない。

その中に風は益々激しくなるばかり、皆死にも狂ひになつて陸の方に舟をつけようとしたけれども、反つて沖の方へおし流される、やつと、高島の近くまで來た時分には船はくづれかけて居た。いやもうどうにもならぬ、どんなにあせつたところで船は沈んでしまふといふやうになりました。これではならぬと思つて、勝さんは錨を下ろさせましたが、海が深くて錨が底につかないので、矢張船は木の葉のやうに揺られるばかり。

弱りきつて居るところに、とう／＼船が二度程も暗礁にぶつかつて、船側に穴が開き、そこから水がドン／＼はいつて來た。勝さんは大聲をあげて、

「我が教師の命令を用ひないで、自分達の力の程をも考へず、こんなところに来て、諸君を危険に陥らし、船をこはして、私は生きとる面目がない。もう私は死を決した。諸君も斯うなつては致し方がないから、生きるか死ぬるか、やれる處までやつて下さい」といつた。

この聲をきくと、皆が勢づいて、非常な力を出して働いたので、とう／＼船は暗礁をはな

生きるか死ぬるか
この世の上
悟るか
死に於て
覺るか
起るか
問題を
示す

人に助けて貰
はなれて危険
を逃れる力を
すえなければ
ならぬ。

人生も亦然
り。

れたばかりでなく、その時から風雨がだん／＼弱つて來ました。
やつとの事で、肥前の灣内に逃げ込んで、その晩船の破れをつくりひ、流れたりこはれた
りした道具をこしらへたが、明くる日になると、立派な天氣になつたので、とう／＼人に助
けて貰はないで歸ることが出來ました。

歸つてから勝さんは教師に逢つて、難船したことを話して、

「先生の言はれることを聞かないでやつたもので、とんだ難儀に遭ひました」といひました。
すると教師は笑ひながら、「今から船のことはあなたに任せませう。學問ではどんなことを
知つて居ても、本當に危険な場合に遭はないと、本當なことは分らんものです。海の上で十
度危険にあつても、十度とも前とは違つた難儀をするもので、その危険に遭つたらどうすれ
ばよいかといふことは教へられるものぢやありません。然し一度危難に遭つて其の場合を味
つた人は、自分でそれから先のことが解るものでも、あなたも、今度の危険で初めて船のこ
とが分つたといふものです。だから船のことはあなたの思ふまゝに任せませう」といはれた
とのことです。

難船に限らず、私共は世の中に處して、思ひもよらぬ禍や危険に陥り、生きるか死ぬるか
といふやうな時、眞剣になつて、禍や危険に打勝つことがあれば、心が鍊れて、それから先

教授指針

受あり犠牲あ
る人にして他
を感化するこ
とが出来る。

はどんなことにも耐へ忍び、また打勝つことが出来るのです。

格言。大死一番すれば、大活現成す(禪語)

精神一到何事かならざらむ

感 化

乃木將軍

自分は偉いぞと思つて居ても、人に意張つたり、不深切なことをすれば、人々は決してそ
の人になづかない。どんなに偉くても、意地がわるければ、その人は人々に厭はれて、多く
の人の上に立つことは出來ない。

人々の上に立つて、尊ばれ慕はれる人は、偉くなくてはならないが、深切で、意張らない
で、優しくしてやる人である。

皆さんは乃木大將を知つて居られる。乃木大將は日露戦争の時分、大將軍として澤山の兵
隊を指揮して、旅順口を攻め落した人です。旅順口といへば、とても／＼攻め落すことの出
來ないといふ程、おそろしいとりてで、それを攻め落さうとすると、何萬人も何十萬人も兵

卒が打死しなければならなかつた。然し乃木將軍の率ゐ居られた兵士は死にも狂ひになつて戦つた。御國の爲ではあるものゝ、また乃木將軍に感服して居た將卒の誠があつて、奮ひ戦つたのである。

こんな將軍であつたから、皆さんは、さを殿しい人、鬼の様にあそろしい人だと思はれるかも知れないが、實はさうでなかつた。

乃木將軍は後に學習院の院長になられたが、或時學校生徒の特別野外大演習をやられた。その演習は十六日間であつたが、その間將軍は、只一晚、貧乏な農民の家にとまられたばかりで、その外は毎晩野宿をして居られた。農民の家に寝られた時だつて、軍服のまゝ、頬冠りをして、快くねて居られた。

その晩、家の主人が、大將に心ばかりの御馳走を出したら、大將はこれを皆小使に分けてやられ、自分は生徒と同じ辨當を食べて居られた。

演習中は毎晩、陸軍兵碇部から、學生の辨當を送つて来てくれたが、或る晩は遅くなつて十一時過になつたから、學生達は大變疲れて、もう皆ねむつて居た。誰も起きるものがなかつたので、大將は一人で起きて、自分一人でその辨當を受取られた。

又或る日の事、一人の學生が辨當の蓋で清水をくんで飲んで居たら、大將がそれを見て、

つか／＼と傍らによつて、

「おれにも一杯のませよ！」といはれ、その蓋の水を、大將と學生と一口づゝ、交る／＼睦まじく飲まれた。

こんなことが度々あつたから、何十萬の兵隊が、よく將軍になづいて、旅順口を攻め落したのだと思つて、學生達は大變感心して居ました。

聖者バルナルド

今から五十年ばかり前のこと、英國の都ロンドンに、バルナルドといふ若い醫學校の生徒があつた。バルナルドは情深い人であつたから、暇の晩には貧民の兒に讀み書きを教へて居た或る寒い晩のことであつた。夜學校がしまつて、歸らうとすると、一人の子供が、ストーブの側に立ちすくんで居た。

バルナルドは子供のところへ行つて、

「もう、おしまひだから一緒に歸らう」といつたらば、子供は、一向歸らうとはしなうて、もぢ／＼して居た。

「何故歸らないのか？」と尋ねると、

「私は家を持ちませぬ。お父さんも、お母さんも居ませぬ。友達も居りませぬ。私は毎晩、

ロンドンに於ける孤兒院の元とバルナルドの人物を知らしめ、善い事なる世界を知るにせよ

お巡りさんの目につかないやうに、他處の家のかげや、お寺の桓根などにねるのです。そして毎日他家へ行つて食べものを貰つて食べて居るのです」と答へた。

「バルナルドは吃驚するやら、可哀想になるやらして、

「ぢや今晚はどこに泊るのかね？」と尋ねると、

「どこに泊るとも、まだ定めて居ませぬ。私のやうに家のない子は澤山外に居ますから、そんなところでも行つてやすみませう」と子供はいふ。

「ぢや、どんなところか、私をそこにつれて行つてくれまいか」とバルナルドはいうた。

子供はバルナルドと學校を出て行つた。もう夜は十二時を過ぎて、午前一時になつて居た寒い風がヒュー／＼と吹いて、齒の根がガタ／＼顫える程寒かつた。空には氷のやうにつめたい星影が輝いて居た。

子供はバルナルドに先だつて、ずん／＼歩いて行つた。綺麗な町を何時の間にか通りすぎると、もう瓦斯燈のあたりもなくて、眞暗な狭い路になつた。ゾツとするやうに淡氣味悪いところである。

と、そこに高い壁が突立つて居た。子供は其處に立どまつたかと思ふと、その壁をごそり／＼と攀ちのぼつた。バルナルドもそれについて登つた。そしてやつとのこととて屋根の上に

あがつた。

すると吃驚すまいことか、そこには十人ばかりの子供が已にあがつて居た。星あかりにすがして見ると、年は十二から十八まで位の者ばかりで、足を笥の中に入れ頭を棟へ向けて、屋根の上に仰向に寝て居るのであつた。バルナルドはそれを見ると、胸がハラ／＼して來た。そしてその憐れな蒼白い子供の顔を見て、そこに跪き、天に祈り、これから吾が身を捧げて、こんな哀れな子供達を救つてやらうと決心したのである。

バルナルドはその時分貧乏な名も知れない學生であつたが、情ある世の人々にその事を話して、寄附金をつのり、二十人ばかりの子供を容れるに足る一軒の空屋を借り、二夜の間は街中から二十五人の家なし兒を集めて來た。

バルナルドは汚ない二十五人の家なし子供を集めて來たその晩程有りがたいことはなかつたさうである。バルナルドは天に向つて感謝して泣いたとのことである。

二十五人が集まると、すぐに五十人となり、百人となり、三十年目には五萬人も家もなく親もない兒が集まつて來たので、その家は八十七軒になつた。バルナルドは此の五萬人の子供を皆、自分の子供のやうに可愛がり、學校をたてるやら、病院をたてるやらした。世間の人皆バルナルドの人物に感心して、入用だけの金を寄附してやつた。

情深いバルナルドの感化を受けて、立派な人になつた人が澤山出た。そのまゝに放つて置けば、泥棒や曲者になる子供が、皆教育を受けてよく育つた。誰だつて親の情と人の情を受けないとよい人にならない。バルナルドは、親のない子供の親になつて、可愛がつて、皆をよく世話したのである。

或る時のこと、三つになる田舎産れの女の兒が、こゝに送りやられて來たが、町になれないために晝も晩も泣いて仕様がなかつた。で會議が開かれて、その子供のために静かな田舎に一軒の家がたてられた。その後も田舎から來て、町になれない兒はそこに送りやられた。その田舎の別家には、鳥の城といふ綺麗な名がつけられた。

それ程バルナルドは眞に深切の行き届いた人であつたから、どんな泥棒でもよい人になりいぢけた人は優しい人になり、悪い者はよい人になつた。

そしてバルナルドは聖人といはれるようになり、その後世界中の國々がバルナルドにならつて感化院をたて、親無し兒や、悪い兒を集めて育てたり、教へたりするやうになりました。

中村敬宇先生

明治維新になつてから後のこと、京都に同志社といふ塾が出來た。その塾の塾長は、名高

い中村敬宇先生であつた。

ところがその塾に大變小説好きの生徒があつて、賤しい物語の書いてある本を喜んで読んで居た。そんなつまらないものを讀むことが先生に分ると、大變なことになるから、その生徒はかくれてそんなつまらない小説本をよんで居たとのことである。或る時その學生は、梅曆といふ下品な小説本を讀んで居たが、急用があつたので、机の下に押し隠して出て行つた。

するとその間に敬宇先生が塾の中を見廻られ、フト机の下の梅曆に眼をつけ、それを懐にしまつて、自分に持つて居られた本をその代り置いて立去られたとのことである。

暫くたつて、その學生が室にかへつて、机につき、先に讀んで居た本をとりあげようとすると、はてな何だか手ざわりが違ふ。とりあげて見ると、不思議や、それは梅曆ではなくてスマイルスといふ人の書かれた名高い西國立志編であつた。その本は大變によいことを教へたもので、高尚な心を奮ひ起さしめるものである。

それを見た學生は、これは先生の仕業と思ひ當つて、恥かしくてたまらず、それから賤しい小説をよむことをすつかり止めて、品行の正しい人になつたといふことである。その人は今日本で名高い學者になつて居るといふことである。

源博雅の笛

藝術といふものは、大變に尊いものである。只の藝ならば、そんなに尊いものではないが、音楽、文學、美術の藝術で、人心を感動させるものは、人物が立派でなくては出来るものではない。昔から世界を感動させた大藝術は、皆立派な大人物がつくり出したものです。

昔、源博雅は音楽の巧みな人で笛が殊更上手であつた。ところがある夜のこと、泥棒がはいつて、大切なものをすつかりかささらつたが、只一本笛をとらなかつた。そこで、博雅はその笛をとつて吹かれたが、その笛の音があまりに美しく響くのに、泥棒はハラ／＼と涙を流し真からよい心が湧いて来て、自分の仕業の大變わるいことを感じ、盗んだものを皆かへして逃げて行つたといふことである。

氣 節(任俠)

勝海舟を助けた澁田利右衛門

海舟先生は維新の頃の偉人でありましたが、青年時代には大變貧乏をして勉強をして居られたのです。あんまり貧乏だつたもので、澁田利右衛門といふ人が、海舟の偉いことに感心して金を出してやつたことがあります。

教授指針

これは山路愛山氏の話である。先づ海舟に就いての復習をする。

澁田利右衛門は北海道の金持の商人であつたが、時々仕入れに江戸へ出て来て、日本橋の或る宿屋へいつも泊つて居た。澁田氏は本が好きで、江戸に来る度に、今の三井の倉庫のあるところに露店を出して居た勘七といふ本屋に、屹度本をあさりに行つて居ました。或る日のこと澁田が本を買ひに行つて、勘七と話を居たら、勘七が

「あなたは偉らう本をお買ひなる珍らしい方ですが、私のところに、もう一人感心な人が買ひに来られます。此の人は勝海舟といふ方で、若い人だが仲々感心な人で、非常な勉強家です」といつた。

すると澁田は、「私も本を読むことが好きだから、ぢや何時かその人に會つて見たいな」といふことで、或る時、勘七の店先で、澁田と海舟と初對面をすることになつた。

澁田が、「私も本をよむことが好きで御座いますが、これからどうぞ御交際をお願いしたいものです。何れ私もお屋敷へお伺ひ致しますが、近くですから今日は私の宿までいらつして下さいませんか」と海舟にいふと、海舟は決行つた。それは永代橋の近邊であつた。その時澁田はこんな話をしました。

「私は一體函館の商人の息子で、子供の時分から本をよむことが好でしたが親爺が大變之れを嫌ひまして、商人の子が本ばかり読んで居るといふのは怪しからぬといつて叱りますから

隠れて読んで居ました。すると、親爺に見付けられて、倉の二階の柱に縛りつけられ、改心するまでは飯も食はせぬと申し付けました。しかし親爺はさういひましたものゝ、矢張吾が子の可愛さに、暫くたつと、ソツと忍び足に二階に来て、私の様子をのぞいて見てゐました。私も一人になつて淋しいものでしたから本をよみたくて堪りません。工合よく近くに草双紙がありましたから、取つて讀まうとしましたが、手が縛られてとれませんから、足の先で引寄せて開けてよんで居ました。するとそこへ親爺が上つて來まして、お前はこれ程本が讀みたいといふのなら、いくら懲りしても仕方がないから、この後は本をよむことだけは許してやる。然しその代りに商賣の方を怠つてはならぬ。商賣を怠るやうであつたら許しはしないぞと、いつてそれから許して呉れましたもので、毎年江戸に來まして、商賣の仕入をします時は、必ず本と有益な機械などを買入れて戻り、國の人の利益になるやうに致し、これも一つの御上に對する御奉公と考へて居ます」

海舟さんは、澁田の精神に感心して、いろ／＼かくさないで考へて居る事を話しました。數日の後に、今度は澁田の方が海舟さんを探ねて行きました。海舟さんの家は赤坂にありましたが、さてその家といふのは、粗末な茅屋で、疊は僅か二枚計りしかなく、あとは根木板ばかりで、天井は残らずはづして薪に焼きつくしてありました。澁田はそこへ入つて來て

家の穢ないのには一向氣にかけるやうでもなく、海舟さんも勿論氣の毒がるといふ模様でもなかつたのです。

話をして居る内になつたが、海舟さんは午飯を出したところで、何の御馳走も出來はしない。そこで澁田が、「私が蕎麥でも奢りませう」といつて、蕎麥をとつて二人が食べました。永らく話をして歸らうといふ時に、澁田は懐から金を取出し、

「これは少しばかりですが、どうか本を買ふ補足にして下さい」といつて差出した。見ると二百兩といふ少なからぬ金なので、流石の海舟さんも、少々呆れて黙り込んで居ると、澁田がいふには、

「御遠慮には及びませんよ。私が有つて居ても、どうせ何かに使つてしまふ金ですから。これ何ぞか珍しい本でもあつたらお買ひになり、およみになつたらそのあとを私に送つて下さるか、又何ぞか珍しい蘭書でもありましたら、それを翻譯してこの紙に書いて下さい。翻譯料は別にあげますから」といつて紙まで残して行つた。

その時分の二百兩といへば、今の金にすれば千圓の値うちがある。それを出してやつて本を讀めといふのは大變氣だての立派なことである。然しそれも海舟さんが偉い人であることを見ぬいたからであつた。何も出來ない者に金を出してやる者は無い。

今の金にして
どの位に當る
かを示す。

仕事をするには、きつと出来る、きつと仕遂げて見せるといふ覺悟がなくては、とても大きいことは出来ない。偉い人は皆自信がある。ナポレオンはもと一個の士官であつたが、後には歐洲を平げて、佛蘭西の皇帝になつた人である。此の人は、自分の兵隊がぢぢけて居る時に、「出来ないことはない。出来ない」といふ言葉は世の中にあるものぢやない。そんな言葉は、字引の中からとつて棄てなければならぬ」といつて兵隊を上げましたものだからナポレオンは大變に勝つた。

年代を示す。

日本の歴史の中で、非常な豪傑に豊臣秀吉がある。秀吉は、もと信長の家臣で、子供の時には草履とりをして居た。その時分、日本の國々には、豪傑が國々を領して、互に睨み合ひをして戦争のたえまはなかつた。秀吉は貧乏な賤しい家から出たが、大變に自信力の強い勇ましい人であつた。秀吉は決して負けるといふ事を思つたことがなかつた。自分はきつと勝つと信じきつて居た。だから一方の旗頭になつて、戦争に出かける時には、きつと自分は勝つと信じ、旗をおしたてた。その旗は有名な千なり瓢箪といつて、旗の竿の先に瓢箪がついて居り、一度戦つて勝てば一つ瓢箪を加へて、後には日本の國の數だけが、この旗の先につけられることを信じて居た。人には自信があると勇氣が出、勇氣が出ると、智慧が出て、何ごとでも出来るものである。だから、秀吉は何處へ行つて、豪傑と戦つてもいつも勝つて、

後には日本中を平げたのであります。秀吉は自分ばかり信するでなく、人にも「負けると思へば負け、勝つと思へば勝つものだ」といつて居つた。

鐵砲の傳來に
つき一言す。
以下凡て地圖
を示して語る

□小田原で秀吉が戦争した時、敵の鐵砲の玉が、秀吉の頭をかすめて飛んでいた。秀吉は敵の城の方に向つて小便をした。ドン／＼玉がとんで来るので、當つては大變だと思つて、家臣が「危い」といつて竹の束を前の方に持つて來た。秀吉は笑うて、

「俺には運がある。俺に玉が當るものか」といつた。

□秀吉は多し豪傑であつたけれども、少しも勿體ぶることなく、よく笑つたり、戲談をいつたりして愉快さうにして居た。或る時、徳善院が諫めて、

「もつと、おも／＼しくして被居らないと、人が重んじません」といへば、秀吉は、

「天下に俺に優る者はない。誰が俺に謀叛するものか?」といつた。

□秀吉が、鹿兒島の島津義久を一打にうつて、義久が降参した時、義久の重臣武藏守は、仲間に向つて、「俺が秀吉に面會したら、奴を眼の前に刺し殺してやらう」といつて秀吉に會ひに行つた。すると秀吉が、

「その方はまだ軍がしたいか?」と尋ねた。

「そなたが敵對されたら、幾度でも戦ひませう」と武藏守はいつた。

秀吉はその元氣を賞めて、陣羽織をぬいで彼に與へた。武藏守はこれを戴いて貰つて次の間に退いた。すると秀吉が、

「まだやるものがあるぞ」とて、側に立て、置いた白刃の長刀をとつて、握り柄のところを差出してやつた。武藏守はその柄を握つて秀吉に難きかくれば、秀吉の生命は一難にとられてしまふ。先に會ひに来る時、會つたなら殺してやらうと思つて居た武藏守は、斯う大膽に出られると、反つておそろしくなり、びく／＼して其れを貰ひ、おそれ畏まつて出て行つた。武藏守が家に歸ると、若い武士どもがやつて来て、

「今日はどうでした？」と尋ねた。武藏守は、「いやはあ、秀吉はエライ度膽のある男で、とても／＼手向ひは出来ない。今日は流石の俺も腰がぬけた」というたとの事である。

□秀吉が小田原城を將に攻め落さうとして居た時分、奥州に居た豪傑の伊達政宗も、小田原が陥つたらば、自分の方に秀吉が攻めて来るに相違ない。秀吉に對しては、どうも勝つ見込がないと思つて、秀吉のところに来て、戦をしないで、秀吉の手下になして貰ひたいといふた。秀吉の引つれて居た大將達は皆大喜びした。すると秀吉は喜ぶ段か、

「もつと早く何故降参に来なかつたか？」と叱つた。

政宗は、「いやどうも」といつて過をおわびした。政宗はその時二三日泊つたが、さて歸ら

うといふと、秀吉が止めて、

「遠い處を、わざわざ来て下されたのだから、御馳走に陣營の模様を見せてあげよう」といつて、後の山につれてのぼつた。そこから秀吉の兵士の陣が一目に見えた。

秀吉はその有様を見せて、

「どうだな。お前も奥州で小迫合には馴れたらうが、大軍の人配りはまだ見たことがあるまい。こんな風に手配りをしてやれば、きつと勝つものだ。どうだ、よく見て手本にしたらよからう」といつて、一つ二つ陣どりを指さして、何のためにさうして居るのかを説明してやつた。説明をしてやる間、秀吉は刀を政宗に持たせ、崖上に立つて後の方も見なかつた。政宗は秀吉よりも、ずつと大きな男であるし、それに秀吉は崖の上に立つて居るのだから、刀で切りかけなくても、一指押せば崖の上から谷底に落ちて死ぬのであるのに、さうはするところが出来なかつた。

政宗が奥州に歸つてからの事、侍臣が秀吉を諫めて、「政宗を國に返へすのは、虎を野に放つやうなものです」といつた。すると秀吉は笑つて、

「政宗が奥州の豪傑だといつたところで、吾が軍の堂々たる有様を見て恐れ入つて居た。政宗位なものは、刀に血もつけないで、平らげることが出来る」といつたとの事である。

□それより前荒木村重が信長に反した時、秀吉がこれを惜しいことと思ひ、自分で行つて村重に諭して聞かせた。村重はそれを聞き入れなかつたが、折角来てくれたから御馳走を出し、酒數獻に及んで、自分で肴をとりに行つた。すると越後守が、村重の耳もとに口をやつて、秀吉を殺せと勧めた。村重は殺さないといつて、秀吉にその事を話した。

秀吉は越後守を呼んで、杯を差し、腰に帯びた短刀を引出物にしてやつた。村重はそれを見て「差替もないのに何うしたことです」といつた。すると秀吉は、「わしは、一本の刀で信長公に事へて居るのぢやない」といつた。

越後守は秀吉を殺したいと思つて居たのだから、殺さうと思へば今殺されたのだけれども秀吉の豪膽にやられて、そんな心は何處へやら消えて行つてしまつた。

此の格言は三つとも必ず授けて自覺の根本的に大切なことを示す。

格言。大人物と小人物との違ひは、一度意を決すれば、死ぬる迄已まざるの覺悟あると否とにある。この氣象があれば、天下爲し能はないことはない。(シエロリング)

己れの善と思ふその心その外には善と思ふものはなし。(カント)

教授指針

偉大なる人物には自信と寛容の二精神の必要なることを示すを以つて目的とする。

自信の廣義を別頁「自信」の部に就て明かにすべし。

一名一名づつに就き其觀念をあらば復起せしむべし。

自信がなければ、自分の生きて居ることに何の價値もない。そんな者は生きて居ても死んで居る。(著者)

寛大

胸の廣い秀吉

日本人の中で、自信力の強かつた人に、秀吉以上の人はなかつたらう。秀吉は賤しい家に産れた者であつたが、その自信ある勇ましい力で、後には天下を一統した。然しどんなに強い人だつて、人を疑がつたり、怒つたりする者は、天下は愚、十人百千人の人を治めることも出来ない。秀吉は自信の心が強いと共に、また極めて寛大な人であつた。秀吉程寛大な人は昔からなかつたらうといはれる位である。

秀吉の部下には、所謂戦國時代の豪傑が幾人も幾人も居た。その部下は一人一人に性質が違つて居た。夫を少しも怒らせず、又不平をいはずに、自分に快く従はせるには大きな人物でなくては出来ることではない。秀吉には、さういふ豪傑を一人も残らず、自分の腹の中に入れてしまつた。

秀吉の部下には、あの有名な加藤清正、福島正則のやうな猛將もあれば、黒田孝高、竹中

政治家政治家の名詞につき説明を要す。

重治のやうな戦謀のうまい智者も居り、石田三成のやうな政治家もあり、長東正家のやうな政治家もあつた。斯ういふ人達はそれぞれその持ち前、天分が違つて、皆豪傑であつたから、お互に仲が悪かつた。加藤や、福島が、石田や長東に向つて、

「奴等は何だ。雑兵の首一つだつて取つたことのない癖に」といつて輕蔑すれば、石田や長東の方からはまた、「何、あの猪武者のイケ／＼連中」だと云ひ返へして嘲つて居つた。だからさういふ仲の悪い豪傑を、うまく自分の部下としてなづかせ、それをうまく使つて行くには大變大きな器量なくてはならなかつた。秀吉は非常に大きい人物で、幾度も人が刺し殺さうと思つて居ても、さういふ悪心の者に對して、少しでも怒つたことがなく、反つて彼等を可愛がつてやつたものだから、悪心の徒も、秀吉の度量の大きいのに度膽をぬかれるやら、有りがなくなるやらで、誰一人手向ひするものがなく、どんなに意地の悪い危険人物でも、一癖ある豪傑でも、何から何まで秀吉の心に従つて、そむく者がなく、ちやん／＼と天下中がうまく治まつて行つた。さういふ度量の振つた秀吉が居つたればこそ、豪傑連中に喧嘩が起らなかつたが、秀吉が死ぬると早速、彼の武斷派と文治派の豪傑連中の間に喧嘩が始まつた。

秀吉の時分には、九州に島津といふ豪傑があり、中國に毛利といふ豪傑があり、四國に長

曾我部があり、奥州に伊達があり、皆非常な勢力を有つた豪傑だつた。それにまた天下中に數へきれない英雄が居つて、皆が皆睨み合ひをして戦争の絶え間はなかつたし、またそれ等の人は多く秀吉には敵對して居たのであるが、一度秀吉に降参すると、秀吉がそれ等の人に大封を與へ、彼等を任用して疑はなかつたもので、誰一人として秀吉に對して謀叛の心を起したものがなく、またお互同士の攻うちをしたことがなかつた。秀吉の部下で、一番智慧があり、落つきがあつて、腹の黒かつた徳川家康でさへ少しも疑はなかつたので、家康は秀吉を徳としてよく仕へた。

秀吉が京都から小田原の北條を征伐に出かける時には、留守役をたのんで、政をさして置かなければならなかつたから、毛利輝元に頼んで、輝元を自分の城に入れ、

「自分が出陣中は天下の政を貴殿に委任する。貴殿の思つたやうに萬事やつてお呉れ」とて頼み、畿内と關東のつなぎのためには、尾州清洲城に小早川隆景を配置し、三河の岡崎城には吉川廣家を配置して守らせさせたから、關西は皆毛利家の手に入つたやうな有様で、秀吉に謀叛すれば戦はないで、毛利家のものになつたのであるが、秀吉はそんなことを一向氣にしないで、頼みきりにして、何の注文もせず自由にやらして置いた。

朝鮮征伐をする時、秀吉は肥前の名護屋に本營をつくつて居たが、支那から使が来て、講

支那は當時明

和を相談したので、こちらの注文通りのことを承知してくれるなら講和してやらうといつて使を返したが、何時まで待つても返事がないので、三十萬の兵を引連れて、自分で朝鮮に攻めよせ、朝鮮八道を巻きあげて、支那の北京まで陥れてやらう。その間日本の政は徳川家康に一任して何の心配もないから、さて出かけようとしたが、故障が出来て行かなかつた。

この時、秀吉が家康に國中の政を一任して行けばよいといつたことに對して、淺野長政はあきれ返へり

「殿下には狐が憑いちや居ませんか」といつて罵つた。

それもその筈家康は腹の黒い豪傑であつたから秀吉が留守中にどんなことを謀るやら分らない。その留守中に、自分が天下をとらうと思へばとられる。長政はそのことを心配して、秀吉に、「狐が憑いちや居ませぬか」といつたのである。然し秀吉は少しもそんな心配はして居なかつた。それでこそ、彼は家康のやうな豪傑をもおとなしく従へることが出来たのである。

羅馬のシーザル

今の歐洲に獨逸だの佛蘭西だの英國だのが興る前、殆んど歐洲全體を支配して居た大きな大變勢力のある一大帝國がありました。それは羅馬帝國といつて、「世界中の道は皆羅馬に集

羅馬大帝國興亡の精神的な原因を知らしめて日本國民

としての反省を提がすと共にシーザルの偉大な人物その寛けの美談を授ける。

「羅馬には俺よりも偉い男が十八人居る」といつたとのことである。羅馬人はそれ程立派な心と愛國の精神を有つて居た。だから戦争をすれば、必ず勝つて、歐洲を従へ、一時は大變立派な政をした。けれどもその後天下が治まると、王様の間に道樂が出て来て、罪人を牛や猛獸と戦はせて、それを見物して、無残な死を期けるのを喜んだり、善良な基督信者を捉へて皆ごろしにしたり、澤山の税を人民からとりたて、苦しめたりしたものだから、さしもの大羅馬帝國も遂に亡びてしまつたのである。

然し前にも云つたやうに、初めまだ羅馬帝國が強かつた時分には政もよく、王様初め人民の精神も實に立派だつた。

今から二千年の前のこと、その羅馬にシーザルといふ英雄が居つた。この人の敵にまたボムペイといふ英雄が居つた。二人は戦争をした。シーザルは大軍を引つれて、アレキサンド

アレキサンドリアは埃及文化の中心である。

地圖に據て當時の羅馬帝國の範を示す。

リヤに行き、ボムベイと激戦しようとしたが、何時の間にかボムベイは暗殺されて、シーザルの家臣が其の生首を持って来た。普通の大將軍だつたら敵將の生首を見て、さぞ嬉しく思つたらうけれど、實に立派な精神を有つて居たシーザルはその首を見ると、悲しうな顔をして顔をそむけた。そして唯ボムベイの印環ばかりを手にしたが、ハラクと涙を流した。それから埃及王が、ボムベイ部下の將士を捉へて、シーザルのところへ曳いて來ると、シーザルは直ぐにこれを赦してやつて、俸給を充分に與へ、深切に使つてやつた。敵の將士は、シーザルの大人物とその情に感心して、こんな立派な人のためには生命を惜まないで働くと思つて、有りがたさに涙を流した。

その時シーザルは羅馬に居る友達に手紙を書き送つて、

「今回の戦争で一番小生が嬉しかつたことは、敵の將士を赦してやつたことである」といつたとのことである。

こんな大人物が、羅馬の王様になつたのだから、羅馬は世界一の強い國になつたわけでありませう。

神色自若

教授指針

膽力と連結して教ふべきもの
單に膽力といふよりも、人心には美妙な働きがある。正義に殉ずる者の泰然とした姿その心を示したものである。

橋本左内

正しい心を有つた人は何時でも悦ばしくて勇ましいが、よこしまな考へをもつた人は、何時でも不愉快で、氣がくさつて、卑怯である。

泥棒は思ひきつたことをするけれども、人に見出されるのが恐くて逃げかくれて居る。泥棒をする者は顔までも意地悪くなつて人が嫌ふ。

正しいことを考へ、よいことをする人は、誰の前に行つても恐いことがなく、その顔は美しく輝いて居る。誰が見ても立派な人だといふやうになる。

明治維新前橋本左内といふ少年が居た。勤王愛國の精神に燃えて、時の權臣の非道を切りに悲しみ憤つて居た。そして國のために奔走して居た。其の時分、ずつと年をとつた學者に藤田東湖といふ人があつたが、西郷隆盛は、この藤田東湖を大變に偉い人だとして尊敬して居た。ところが其の後隆盛は、初めて橋本左内に遭つて、その偉いのに感心してしまつた。隆盛のやうな偉人が感心した位の人物であつたから、どれだけ偉らかつたか思ひやる事が出来る。その時分、左内はまだ二十歳であつた。

隆盛はその時分、「日本には二人の豪傑が居る。一人は先輩の藤田東湖であつて、一人は若い橋本左内である」といつて居た。

その頃有名な吉田松陰も亦、左内に大變感心して居た。
ところが、熱誠な左内は、その時分の權官に憎まれ恐がられて、獄に入れられた。終に幕府はこれを死刑に處した。左内と一諸に死刑に處せられる武士たちは、齒を喰ひしげつて残念がり、顔色をかへ、切りに騒いで奮慨して居た。けれども左内はびくともせず、顔色も變へないで怒り悲しむ人々を静めて、
「己に死が定つた上は怒つても駄目。よろしく泰然として永別をしたまへ。僕は郷里越前の田舎萬歳を躍つて見せよう」といつて、謠ひ且つ躍つて、平然として死に就いたとのことである。
心が正しく義に勇ましかつた左内は、殺される時にも、少しも狼狽しないで平然として居ることが出来たのであります。

成功

河村瑞賢

徳川時代の豪商に河村瑞賢といふ名高い人がありました。瑞賢は尾張の國渡會わたらいに産れた人で、十二歳の時分故郷を出て、江戸に行き、何ぞよいことはないかと思つて、さしあたり生

教授指針

立志と関連して成功の基礎となる精神的基礎を授ける目的とする。

河村瑞賢が新井白石に自分の娘を妻はせようとして白石に退けられたことを復讐して準備とする。

成功の一秘訣は決心は智慧を生むものである。

活に困るので、七年間も日雇人足をして居た。けれども一向金儲けの口もなく、一人食ひにも困るのであつたから、故郷に歸らうと思つて江戸を立出た。けれども折角出て来て、望ましいこともなかつたので、不愉快な思ひをして歸て居ると、途中で突然、
「男とも産れたものが、まだ真劍にもなつて見ないで、すぐ歸るといふことがあるか？ 何か生命がけにやつて見よう」と思ひ定めた。
そこで足をかへして、また江戸に向つて歩き出したが、品川に着いた時、海ばたの堤に腰かけて休みながら、
「さて江戸に戻つたら、どうして金儲けをしよう」と案じて居ました。その日は丁度舊曆七月十六日の干蘭盆しんらんぼんであつたから、精靈棚しんりやうだんに備へた幾多の茄子や胡瓜などが浪にもまれて、すぐ足の下に流れて來た。
それを見て居ると、瑞賢は不圖氣がついて、「これは惜しいことだ、あんな立派な野菜を海に棄てるのは勿體ないことだ。よからう。あれを拾つて一つ商賣して見よう。金儲けをしようとならば商賣をするに優つたことはない」と一人語をいひ、それから心秘かに喜んで、高輪に一軒の小長屋を借り、草鞋もとかないで、また海岸に行き、其の近邊にうろついて居た乞食を集めて、茄子や胡瓜をすつかり拾ひあげさせ、自分の家に持つて行て、それを綺麗

に洗ひ、樽を買つて来て漬物をつけた。漬物がよくなれると、一樽を荷つて、丁度その時何百人の大工左官が集まつて居た大名屋敷に行つて、晝飯のお菜に其の漬物を賣つた。何分人数の多いことゝて、一樽の漬物は一時に賣れてしまつた。斯うして三日の間大工左官に漬物賣りに行つて、資本いらずに可なりの金が儲かつた。

その後瑞賢はいろ／＼な方法を考へ出して、利益に利益を重ね毎年毎年金が増えて行た。何をするにも瑞賢は眼のつけ處がすばやく、仕事にとりかゝつたら一生懸命外目もふらずに働いたもので、金の儲かり方も人々よりはつと早かつた。

その後、江戸に大火事があつた時に、早速世間の需用を目につけて、木材を買ひしめ、瑞賢は非常な金儲けをした。だからその評判は天下に擴がつて、諸大名の間に出入し、土木建築の請負をして天下一の金持になつた。

貧乏な家に産れ、永い間日雇人をして、食ふに食はれなかつた瑞賢も、一旦心を決して志を樹て、眞剣になつて立働いたお陰に、こんなに大成功をすることが出来たのであります。

希臘の大政治家ソロン

三千年も前、世界で一番開けて、強かつた國は、希臘でした。希臘の人民は體格が立派でそして勇ましく、國を愛する精神が大變に強かつた。そして其の上に學問が大變進んで、特

事は何でも眞劍勝負。

人の成功は單に金錢を貯へることではなく大きな家に

住むことではなく立派な人物になることをつて目的とする。

本篇は希臘文明の大略を示し其文明の精神上の目的を達しようとするものである。

これ亦一の奉仕及び殉教。

にその時分の美術は今日になるまでも、實に立派なものとして世界から尊敬されて居る。だから希臘には大變に偉い人があつた。ソクラテスは希臘の聖人です。希臘にはまたホーマーといふ名高い詩人や、ソロンといふ名高い政治家や、フィデアスといふ名高い畫家もありました。

ソクラテスのことは皆さんが已に知つて居られます。

ホーマーといふ詩人は、活動寫真にも出て居るが、オデッセイといふ長い物語詩と、イヤッドといふ長い物語詩を書いて、希臘の人々に美しく勇ましい精神を鼓舞した人、詩をかくためには貧乏をものともせず、後には乞食にまで落ぶれた人です。

フィデアスといふ美術家は、繪も出來、彫刻も出來る人で、いろんな立派なものをつくつたが、パーセノン神社といふ世界一の大神社の壁に、希臘國民の行列の彫刻を仕込んだ人でその彫刻は今日も猶残つて居て、その立派なのに誰しも驚き、こんなに立派なものゝ出來たのは、昔の希臘人が立派な精神を有つて居たからだとして今日の學者が感心して居るのです。

ソロンといふ政治家はまた大變頭のよい立派な人物でありまして、この人の政の仕方は今日の世界中のよい政の手法になつたのです。日本の憲法もこの人のつくつた政の仕方の御恩をうけて居るところがあるのであります。

今日は此のソロンといふ人の話を致します。

その時分、希臘にはリヂヤといふ王様が居られました。或る日のこと、王様はソロンをお召しになつて、世界で類の無い程美しい、そして廣い御殿や、高い高い樓閣につれて行つてお見せになりました。御殿は、雪のやうに白い大理石、いろ／＼な美しい寶石で建てられ、廊下にはいろ／＼な美しい彫刻品や、繪が飾つてあり、庭には美しい花が咲き、うまい實のなる草や木が綺麗に植まつけられ、世界中の珍しい植物が植まこまれ、美しい聲を出して囀る小鳥などが澤山に飼つてあり、そして天下の美しい女が女官になつてお仕へして居ました。何を見ても目がくらみ、魂がとろける程美しかったです。

一通りさういふ立派な見物を済まして、王様は、また綺麗な綺麗なお部屋にソロンをつれて行かれた。そこには美しい花を並べたやうな立派な敷物があり、いろ／＼な寶の飾りものがあり、珍らしい獣の皮があり、堪らないやうによい臭ひのする花がありました。ソロンが食卓につくと、大變な御馳走が出ました。皿でも碗でも杯でも、水晶や、金や、銀でつくつてあつて、まるで眼の玉がクル／＼するばかりであつた。

すると王様が、ソロンに向つて、

「お前は此の世の中で唯が一番幸福だと思つて居るか？」とお尋ねになりました。

ソロンはそれに答へて、

「今は亡くなつて居ますが、私の友達にセリュスといふ者がありまして、アゼンスに住んで居ました。徳高く、心も清い立派な人で、一生涯食乏でありましたが、少しもそれを苦しいと思はず、只々國の繁榮を念じて居りました。そして後、お國のため戦に行つて勇ましく戦死しました。その子供達も皆賢い人々で、世間から尊敬を受けて居ります。私はセリュス程幸福な人はあるまいと思ひます」と斯う答へました。

王様は的が外れてしまつた。ソロンは王様を一番幸福だといふのだらうと思つて居られたけれども、反つて人民のセリュスを一番幸福な人だといつたからです。

「それぢや、その次には誰が幸福だらう？」と王様はまたお尋ねになると、ソロンはまた、「王様であります」といはないで、當時希臘の國で人々の感心して居た貧乏な家の親孝行の兒の名をあげた。

すると王様はいよ／＼堪りかねて、

「お前は、朕をセリュスよりも幸福ではないといふのか？」といはれた。

ソロンはそれにお答へして、

人事の不可測なること、そして人は凡ての境遇に處する力を有たなければならぬことをよく示す。

「王様は、世の富をお極めになつて居られます。けれども其れはまだ眞の幸福といふものはありませぬ。定めのないのは人の一生で御座います。どんなに富貴であるにせよ、人は何時か思ひがけない不幸に陥るもので御座います」とお答へしたのであります。

王様はそれをお聞きになつて、あまり御機嫌はよくなかつたが、その後希臘、波斯と戦争をしましたが、リチャ王様は、波斯軍に擒にされ、王位を剝がれて、奴隸になされ、苦しい仕事をやらせられたのです。その時になつて、リチャ王様は初めて、ソロンの云つたことを思ひ出しになり、

「あゝソロンのいつたことは誠だつた」と仰せられたとの事であります。

ソロンはこんなに賢い人でありました。人が立身した立身したいといひますが、金持になつたり、位が上つたりすることが必ずしも幸福ではなく、またそれは眞の成功といふものではありません。人の道を踏んで、何時も勇ましく働いて居るのが眞の成功といふのです。

眞理は一時人に踏みにじられて居ても、また勝つ時があります。奢りたかぶる者は、いつか亡んで、貧しくて正しい人賢い人が人々の上に現はれて来るものです。

リチャ王様は波斯の擒となつて、兵卒どもと一緒に奴隸になつて働かれました。並々の人

境遇に處することを知つたリチャ王の美點を知らしめる。

であつたら、残念さに自殺をしたり狂氣になつたり、するのだが、リチャ王様はその苦しみに堪へて、人民と共に働きになつたことは、何と偉いことではありませんか？希臘の國民が忠君愛國の精神に富んで居たのは、斯ういふ王様が居られたからであります。

事業に失敗して自殺したり、事が出来ずに自棄をおこすやうな人は、よくこの事を思つて、どんな禍に會つても、騒がずによくそれに耐へ働いてはなりません。さういふ人は實に偉い人で、人々から尊敬をうけるばかりではなく、また大に用ゐられる時があります。

「天は人を苦しめて、ゑらくなして下さる」と孟子のいはれたことは、實にそのことです。

布哇の一大成功者

皆さん、亞米利加はどこから何處まであるか、此の地圖で指して頂きませう（世界地圖を掛けて先づ問を發する）

日本から、亞米利加に行くには、此の太平洋を三週問程かゝつて渡つて行きます。その海の上に布哇といふ島があります。どこが布哇でせうか？

布哇は日本から方向はどう當りますか。然り南の方に當ります。ずつと／＼南の方にあります。南の方には植物がよく出來ます。南國産の植物にはどんなものがありますか？

植民の精神を鼓舞すると共に徒手空拳に漕ぎ成功する質問

南國産の植物
をあげさせ給
や實物にて想
像せしむる。
甘蔗收穫の寫
眞畫を準備す
る。

布哇にもそんないろ／＼な植物が繁殖して居ますが、その中でも一番有名なのは甘蔗であつて、甘蔗からは砂糖をつくるのです。毎年布哇で出来る甘蔗は非常なものであるから、アメリカは早くからこゝに目をつけて自分の國に占領してしまつた。然し布哇はもと獨立した王國で、自分の國がアメリカにとられる時には、その時分の女王様が日本に來られたことがあります。

日本人は三十年も前から、労働者が布哇に渡つて行つて、働いて居た。初めは千人二千人以上なものであつたが、今では十萬人も行つて働いて居る。熱帯國であるけれども、涼しい風が吹き、また時をきめて、涼しい雨がふり、木が茂つて居るので大變に暮しよい、こゝで日本人は、布哇の土人に大變信用されて居るから、土地はアメリカのものになつて居るけれども、日本人の勢力は大變に強い、今は日本人の中で、素手一本で渡つて行つて、働かだめして數十萬の身代をつくつて居る人がいくつもあります。

素手一本で布哇に渡つて行つた日本人の中、大變よく成功した人に本重和助といふ人があります。

この人は山口縣の人で、今から二十六七年前、何も持たずに布哇に渡つて行つて、先づ西洋人の商店に雇はれ、商賣の練習をして、よく腕をねり、また俸給を貯へて置いて、布哇の

事情が解つて來ると、藥を賣つたり、本を賣つたり、雜貨店を開いたりして働いたもので、二十年位の間は數十萬圓の利益を得、後には帝國貿易會社を組織して、本店を東京に置き、支店を横濱、名古屋、大阪、ホノル、に置き、盛んに取引をして、今は年に二百萬圓以上の貿易をして居るが、毎年非常な勢でその貿易は大きくなつて居ます。

本重さんは今は東京に居て、時々米國布哇との間を往來して居ますが、布哇に居る間は、社會のためにいろ／＼事業を興したり、日本商人同志會の會長になされたりして大變人望があり、此の後どれ程多くの資産を増やすやら分りません。

金を一文も持たずに南洋に渡つて行つて、せつせと働いて、今はこんな大事業をする人となつたといふことは、外國に出かけて、大に儲けようと決心した若い時分の心がけの賜物です。

私どもは無一文の貧乏に生れて、學校で勉強することの出来ないことをくやむではならぬ。發奮すれば、貧乏の方が反つて大成功をする。皆さんは奮發と働きぶり一つで、どんな偉い人になるやら分らんのです。

努力

教授指針

努力

先に授けた忍
耐の教訓に
促すを以て
的とする。

秀吉の努力と忍耐

どんな偉い人でも、一足飛びにエラクなるものではありません。どんな偉い人でも、永い間苦痛に耐へ忍んで努力して行かねば、持つて産れた天才も腐れてしまふものです。世の中には、若い時分には、學校でよく出来るものだから、天才といはれて、大きくなつたら、どんなにエラクなるだらうと望みをかけられた者が、大きくなると一向つまらない人間になつてしまふ事がある。これは自分は努力しなくても偉いと思つて、何事にも辛抱しないからである。

世の中にはまた懶巧者だといつて賞められる人がある。何事にもチヨコ／＼気がきくが、腹がなくて上つ調子だから、大きくなると、馬鹿だといはれて居た人の方が反つてエラクなる。

皆さんエラクなるにはどうしても忍耐努力しなければなりません。

秀吉は、皆さんが知つて居られるやうに、大變度膽が据つて、人を信じ、また自信力が強くて、天下自分より偉いものはないと思つ居ました。然し秀吉は只自分が偉いと思つて意張つたのではない。秀吉は子供の時分から、忍耐に忍耐を重ねて、人百倍努力して來たのです。だからあんなに偉くなつたのです。で今日は、秀吉が、どれ程忍耐力が強くて努力して

秀吉の自信
大と共に必
授けて日本
人の特質日
國民性の刺
を計らねば
らぬ。

來たか、そのお話を致しませう。

○
秀吉は貧乏な家に産れましたし、またその頃は學問も盛んでなかつたので、學問上からいふんよいことを皆さんのやうに教はらなかつた。けれども秀吉は心掛がよくて、子供の時分から、「小さな事に怒ると、大きな事が出來ない」ことを知つて居ました。

秀吉は貧乏であつたし、それに身體が小さくて、顔が猿のやうだつたもので、近邊の悪戯子供が始終、秀吉を虐めて嘲つて居ました。十二三の頃であつた、或る日のこと、悪戯坊どもが、秀吉を泥溝の中に突き落したから、秀吉は頭から足まで泥まみれになつた。秀吉は泣きもせず、怒りもしないで、匍ひ上り、「馬鹿どものすることだから、仕たいことなら何でもして置くがいゝ」といひながら家に歸つたといふことであります。

少し大きくなつて秀吉は、信長に奉仕した時、秀吉はヤンチャものであつたから、信長が頭から小便をしかけたことがある。

「奴、いくら信長公だといつたつて俺に小便しかけなくてもよさ相なもの」と初めは思つたが、それでも秀吉は少しも怒らず、

「小さな事に怒ると、大きな事が出來ない」と思つて忍耐した。

階級制度。

こんなに辛抱力のよい子供でありましたから、十八歳から三十三頃になるまで、十五六年間、いろ／＼な苦しいこと、面目のないことばかりあつて、誰あつて自分の偉いことを認めしてくれる人もなかつたが、彼は只々忍耐して、努力を怠らなかつた。

その時分は、今とは少し時勢が違つて、立派な家柄に産れた人は、早く立身が出来たが、秀吉のやうに貧乏な賤しい家に産れた者は、殆んど武士の間に加はつて立身することは出来ないことであつた。だから秀吉は何處へ行つても馬鹿にされて、辛い目に會はされた。けれども秀吉は、どんな辛い事にでも、人々に出来ない無理なことにも元氣よく耐へ忍んで來ました。

秀吉が信長に奉仕して十年目、彼がまだ二十四五にもならない頃だが、もう十年もお仕へしたので、雑兵の二三十人位は引きつれて行く位にはなつて居た。その時分、信長が兵を美濃の國に差しむけたので、秀吉も従軍した。

その時秀吉は、氣拔な男だから、身分不相應な立派な旗をさしたてゝ居た。すると信長がそれを見て、「あそこに見なれぬ立派な旗を押し立てゝ居る者が居るが、一體あれは誰だ」と近臣に尋ねられた。すると近臣は、

「あれは木下藤吉郎の手で御座ります」と答へた。すると信長はむつくと怒つて、秀吉を

呼び、

「あれが許しもしないのに、不都合千萬、生意氣なことをして居る」とて、諸軍の前でその旗竿を切折らせ、「この後は斯様なことをしてはならぬぞ」と叱りつけられた。

秀吉は信長公のために一つ手柄をしようと思つて勇み立ちながら、さうして居たのに、反つて散々叱られたもので、心の中では残念であつたが、少しも顔色を變へず、

「恐れ入り奉る」といつゝ退き、猶更心を盡して一生懸命に働いた。主人に叱られると、すねてなまけるのが世の常であるのに、秀吉は叱られてから猶更心を勵ました。

秀吉は人並以上に元氣者であつたので、時々並はづれた事を仕出かすので、始終信長に叱られて居た。信長は怒るとおそろしい勢であつた。

天正五年夏、秀吉は信長の命をうけ、柴田勝家の軍につゝいて北陸の方へ進軍したが、勝家を嫌ひであつたのか、または他に／＼の事情があつたのか、よく解らないが、秀吉は無届けに自分の軍兵を引きつれて歸つて來た。信長は大變怒つて叱りつけた。けれども何時ものやうに少しも怒らないので、信長もとう／＼感心して、この男は大きな器量だと思ひ、後には中國征伐の總大將にしてやりました。

秀吉は斯うして何事にも怒らず、あらゆる苦しいことに辛抱して堪へ忍んだものだから、

信長が死ぬると、遂には天下をまたしく間に統一してしまつて、身は關白として人臣の權を極め、天下のことは何一つ自分の思ふ通りにならないことはなかつた。

秀吉が關白になつて、天下の大勢が一身に集まつた時、秀吉の昔の戦がたきに徳川家康といふ喰へない豪傑が居た。家康は非常な豪ら者であつたから、何時どんなことをするか分らなかつた。だから秀吉はこれを攻めうてば、一年位もかゝると立派に亡ぼすことが出来たのであるけれども、そんな小さなことに氣をもむで居ると、世界統一は出来ないと思つて居ながら、そのまゝにして置いた。

* * *

もう一つ秀吉の忍耐強いことに就てお話ししたいことがある。或る時、秀吉が諸將を集めて茶會をやつたことがあつた。秀吉が先づ大きな碗に茶をたて、諸將にすゝめるのである。諸將はそれを口につけながら、それからそれへと廻して大谷吉隆の前に到つた。ところが吉隆はひどい癩病やみで、ともすると血膿が鼻汁となつて出て来る。茶碗は廻り廻りて、今吉隆まで来た。吉隆はそれをとつて口端まで持つて来たが、其の一刹那ダラリと例の鼻汁が茶碗に落込んだ。目の早い秀吉は早くもそれを見てとつた。諸將はまたそれに氣がつかかなかつたので、秀吉は素知らぬ顔で、

人を動かすは此世の感動である。至誠の人は必ず感服の上には必ず

植民の精神を鼓舞し、實業の精神を喚起し、忍耐の力を共らに奮起せしめ、神を以つて常神を起つべきことが目的である。

「吉隆、それは湯加減がまづい。今一度たて直すから、此方によこせ」といひながら、茶碗を取つて只一息にグツと飲乾して、新たに茶を易へて、それをまた吉隆から廻してやつた。その時吉隆の心はどんなであつたらう。癩病やみとあれば、どんなに英雄だつて人に嫌はれて物相手にされず、ましてや何で、それを一部の將軍として好遇する人があらう。それに秀吉は、よるべ無い彼を引立て、しかも吉隆の鼻汁のまじつた茶を平氣でのみ乾して、また新しい茶を吉隆に奨めたのである。

吉隆が心身をあげて、秀吉に仕へたその立派な精神は、實にこの一碗の茶にあつたのである。吉隆のやうに病氣をして窮して居た者が、秀吉のやうな人に救はれたのであるから、どうして一生懸命になれないで居られよう。秀吉のやうな忍耐強い精神と深い情があつたらばどんな人でも感動せずには居れないのであります。

米國の馬鈴薯王 (牛島氏苦心成功談)

米國人はよく馬鈴薯を食べる。馬鈴薯の料理には三百通りもある位で、毎日少しづつでも馬鈴薯を食べないことはない。それで馬鈴薯の産出も多い。オレゴン州は米國一の馬鈴薯産出地で、年に六十萬俵、ワシントン州では年に四十萬俵出る。けれどもこれは一洲中の農民がつくつて收穫する總額であるが、カルフォルニア州では、日本人が只一人の經營の下に年三

をくねつて思案した處で何うしよう。」

斯う思つて、牛島さんは年々殆んど倍の勢で事業を擴張した。初めの十五英町は、翌年になつて六十五英町に増し、それから何年かの間失敗ばかりしながらも、とう／＼三百六十英町までに押し擴めた。斯ういふ大膽なことは並々の人のとても實行することの出来ないことでもあります。前の年には馬鈴薯の出来が悪くて困り果て、居たのに、明くる年になると、どし／＼と擴張して行つたのです。けれどもこれ程の牛島さんだつて、もうとても望みが無いと思ふやうになり、明治二十九年三月のこと、筑後なる舊友に手紙を送り、且つ自分の寫眞をもそへて、「今迄は随分我慢しましたが、今年がもう最後でせう。一縷の望みがないわけはないが、小生の事業はこゝに全敗して、再びお目にかゝつて快談することも出来ませう」というてやつたとのことである。

然し人は死ぬるか生きるかといふ悲惨な立場に陥つても、猶それで辛抱して居ると、天が助けるものであります。

その年即ち明治二十九年の春には全く失望しながらも、猶牛島さんは手をつくし、力をつくし、心をつくし、財力をつくして三百六十英町の土地に馬鈴薯を植まつけたら、その秋になつたら、天の助けか大豊作で立派な馬鈴薯が驚く程出来た。さあ、さうなると、夜の黒雲

をわけて、太陽の出で来るやうに牛島さんの前途は光明に輝いて、今迄の借銭と一時に拂ひ、來年はまた大成功を念じて、いろ／＼栽培上に苦心し、手を益々擴げて植まつけをした。氏は成功せむが爲には、有らむ限りの難儀を辭しなかつたのである。

ところが、その翌年の收穫は駄目で、大變また困つた。それにも屈せず、氏は苦心經營して、五六年の間、成功したり失敗したりして居つたが、明治三十三年になると經驗が出来、智慧も熟して、その秋には三千英町の畑に立派な馬鈴薯が出来て、もう收穫時も近まつた。さあその時の牛島さんの喜びはどうであつたらう。日が暮れて牛島さんは畑の中から詩を吟じて歸つて居つたといふことである。

ところが不幸なことには、一朝大洪水のために、馬鈴薯は皆流され、畑は荒れ果て、今迄の苦心も全く水の泡になつてしまつた。

そこで、世間では、「もう牛島さんはとても二度と起つことは出来まい」と噂をして居た者があつたとの事であるが、また或人は氏のために入用な丈の資金を借りてあげるからと申込んだとの事もあります。然し日本人の體面を重んずる牛島氏は輕々しく人に金を借りず、或る人に資金を相談して一層大規模の經營に著手しました。そして氏は何時もの調子で一から二に、二から四に、四から八に、八から十六へといふやうに土地を擴げてやつたところが、

七ころび八起

今や已に立派な経験を積んだこととして、年々非常に立派な旨しい馬鈴薯が驚く程澤山出来るやうになりました。

今日のところでは氏一人の経営で一年に出来る馬鈴薯は四十萬俵で、そんな大農園をやつて、しかもその様によい馬鈴薯を出して居る者は米國人にさへ一人も居ないのです。そしてアメリカ人の間に於ける牛島さんの信用といふものは大したものので、先にもいつたやうに見本も見ずに、遠方から一時に數千俵も注文して來るのであります。

一體馬鈴薯といふものは、毎年同じ土地に栽培すると年々品質が悪くなり、出來も亦少なくなる。だから牛島さんは、毎年々々より善きものをより多くつくり出すには、種いもに注意し、土壤に手をつくし、種子は自分の農園に出來たものゝ中から、一番よいのを選んで、これを氣候風土の變つた何百哩の遠方に移し植え、更にこれを方向の違つた數百哩の遠方に植えつけ、三度目に自分の農場附近に栽培し、四回目初めて種子薯としてこれを用ひ、土地の手入、氣候、乾濕の如何を考へて、同じ大きさの味のよいのをつくり出さうとする苦心は非常なもので、三四年前から準備して自分の農園に植つけをして居るのであります。これ程手を入れて立派なものをつくるのであるから、アメリカ人が牛島氏を信用して、その販賣高が年々増加して行くのに不思議はありません。

牛島氏はさういふ苦心と、膽力と、深い注意とで遂に馬鈴薯王の尊號をアメリカ人に貰ひ、日本人としての名譽を外國であげて居られるのです。

言語

人物と言葉

人は行ひによつて人品が解るやうに、言葉によつても人品が解ります。どんなに偉らさうに言葉で飾つても、その人間よりも、もつと偉い人が聞いて見ると、ぼろが見えて可笑しいものです。

人は言葉によつて心の正しいことも、不正なことも分ります。

人は言葉によつて考ひ深い人か、軽々しい人か分ります。

人は言葉によつて勇ましい人か、卑怯な人なんか分ります。

人は言葉の使ひ方によつて、仲よくなつたり、喧嘩を初めたりします。

くだらない事を嘔舌り、小さなことに悔み、一寸したことに人のことを悪くいひ、眞實でもないことを、眞實らしくいひ、人から賞めて貰ひたさに、いろんなよいことを飾りたてていひ、大切なことを軽々しくいふやうな人は實に賤しむべき人間です。

教授指針

處世上、修養上、健康上、また世のため、に正しく勇ましくよくこばしい確言を語るときに、その目的が目的

私共は世の中に立つと、その言葉使ひで、人品が鑑別されて、信用すべき人であるとか、信用の出来ない人だとか、人に思はれますから、賤しい曲つた心を表はさないやうに男は男らしいよ、言葉を、女は女らしい優しい言葉を語らねばなりません。

人を怒らせたり、人をいやしめたりすることをいふのは、それだけ自分の価値を下げるのです。人に媚びへつらふことは、よくないことだが、私共は人が希望を持つやうに、人が喜んでくれるやうなことをいへば、それだけ人は自分を大切に思つてくれるのです。

悲しんで居る人を慰めるといふことは、大變よいことです。

失望して居る人に望を持たせるやうなことを云つて聞かせるのも大變よいことです。

斯ういふことをするのに、少しも金はかゝりませんから、どれだけでもよいことが出来るのです。

私共がよいこと、勇ましいこと、人のためになること、美しいことをいうて居ると、大變私共のいふことに感動して、そのためによい人、勇ましい人、世の爲になる人が澤山出てくることがあります。言葉で人を導くといふことは、非常に世のため、國のためになることです。詩人や、文豪が世のためになるのはそのためです。

言葉といふものは、こんなに大切なものでありますから、西洋の教にも、

「言葉は道である」とか、「ことばは神である」とかいうてあります。

その貴い言葉を汚して、卑しいよこしまなことをいつたが爲に大變不幸に陥つたり、職を失つたりする者は多いものです。

また悪いことを云つたがために、人に迷惑をかけたり、世を害したりして、人々の憎まれものになつた者も多いものです。

人を悪人だ、泥棒だと嘲つて居ると、嘲られた人の心が曲つて、そんな悪い人になることがあるものです。そんなことをいふ人は大變によくない人です。

人と人との喧嘩は言のいひ方が悪いから起ることが一番多いのです。甲が乙に向つて、「馬鹿野郎」といへば、乙が怒つて、「畜生」といふやうに、遂には兩方の言ひ合ひとなり、後にはつかみ合ひとなるやうなものです。人から悪くいはれたら、黙つて忍んで居るが一番よいのです。

それとまた勇ましいことを常にいふ人は勇ましくなり、泣ごとばかりいふ人は、卑怯になるものですから、私共は常に勇ましく正しいよきことばかりをいふやうに心掛けて居なければならぬのです。

それからまた貝原益軒先生は、養生訓でつまらないことに饒舌り過ぎる人は、身體が弱くな

誠なる言葉
の人を感動せ
しむることを
教ふ。

るといはれて居ます。これも考へなければならぬことです。

アントニーの演説

羅馬の勇將シーザルは、非常に立派な人であつたが、それでもシーザルを憎む者が當時の羅馬には澤山居つて、或る日のことシーザルは刺客の爲めに暗殺されました。

シーザルの死體が街にかつがれて來た時、アントニーといふ勇將が、國民の前に立つて、殺されたシーザルを賞めて、誠に惜しいことをしたといふ演説をしました。アントニーは、あらん限りの同情と誠を以て涙を流して演説をしましたもので、これを聞いて居た人々は、皆感動して、シーザルの人物の立派であつたことを知り、シーザルを殺した者を憎む心が湧いて來ました。

アントニーは、演説を終ると、シーザル上著を取りはなして刀で切りつけられて、血の滴るところを見せ、口を極めて暗殺者を惡漢だと嘲りました。

するとそれを見、それを聞いて居た人々は、益々シーザルを痛むで、暗殺者を憎むやうになり、シーザルの火葬葬式をすますと、火葬の火の燃えて居る薪をとつて、暗殺者や陰謀人の家を焼打にしようとして狂ひ上つて出かけました。

一人の男子が口を開いて語つたその言葉が、これほど國民の感情を動かしたのです。私共

は事に臨んで、熱誠な言葉を語り、善を賞めて、惡を責むれば、その力は大變に人々を感動させるものです。

沈黙

言葉は大切なものでありますが、また時によると、言をいはない方がよいことがあります。

昔ピタゴラスといふ希臘の學者は、「沈黙したゝめに後悔する者は稀なり」といひまた、「沈黙は無意義の言語に優つて居る」というて居ますが、黙つて居たゝめに、饒舌るよりも反つて益になることは度々あることです。私共は、どんな時にはよく語らねばならぬか、どんな場合には黙つて居なければならぬか、よく考へ分けなければなりません。

人は正しいことのためにいはなければならぬ時は、不正な人や惡人にまけないやうに、しつかり言はねばなりません。つまらないことをいふよりも黙つて居る方がよつほどよいのです。「沈黙は雄辯也」といふこともありまして、黙つて居つた方が反つて人を動かすことがあるのです。

人から嘲られた時には怒りを制して黙つて居る人は偉い人で、その人はきつと嘲つた人に打勝つことが出來ます。

ピタゴラスは
希臘の哲人約
二千五百年に
生る。

教授指針

反省と改心

或學生の改心談

己が身を顧みてやましいところがあつたら、断然改心すべきことを教ふ。

山口縣の秋吉村に、本間俊平といつて石屋をして居る人がある。この人は越後彌彦山の麓に産れた人で、十二三の時分、両親に別れて、福島に行き、それ以來獨立の生活をして、いろ／＼な難儀に遭つて腕をきたえ、學校にも學ばないで、宮内省の可なり重用な官吏になりましたが、或る時のこと、山口縣の秋吉村に、大理石が出るといふことで、視察にやられた。その時、本間氏は非常に感ずるところがあつて、視察を終へて東京に歸ると、三ヶ年の間、夜分になると、石屋の稽古して居たが、逐には宮内省を辭職して、山口縣に行つて、大理石を採掘し、美術建築の石材を彫刻して行く事業を始めました。何のために始めたかといふのは、世の悪人不良少年達に同情して、それ等の人を少しでも改心させて立派な人になしたいとの考へから始めたのでした。

本間氏は熱誠豪膽な人で、様々な困難に遭ひましたが、それに打勝つて事業をすゝめました。すると、其所へは、不良少年や、出獄人などが澤山たよつて来るやうになり、悪人だといふので世間から棄てられて、寄方ない人が、其處へたよつて行つて、氏の感化を受けて、

立派な人物になつて居る人がいくらかあるのです。本間氏に就ては様々感心すべき行が澤山ありますが、或る時のこと、こゝに一人の青年がたよつて來ました。

その青年は大學生で、お父さんも學校の先生だといふことであつたが、何せよ怠惰者で、放蕩息子で、學校は落第ばかりして親に心配をかけて居ました。

するとどういふ折があつたのか、また此の青年が餘り放蕩して落第ばかりするので、そろ／＼寂しくなつて來たのか、かねて名高い本間氏のところへ尋ねて來ました。

青年が始めて本間氏に會つて話をして居ると、本間氏が

「一寸こちらへ！」といはれました。

すると青年は石かつぎでもやらせられるのかと思つて、

「先生、私は労働は出來ません」と出かけた。

「いや、労働して貰ふんぢやない。遠方からわざわざ來られたから、山の中で何にもないけれど、一緒に食事しませう」といふことだつたので、青年は本間氏について行つて、心ばかりの御馳走にあづかつた。

すると、食後の散歩に出かけようといふので、本間氏は他の青年労働者たちをもつれて、散歩に出かけた。

そこには大理石の出る山があり、山に沿うて幅の広い川があり、川の向ふは畑になつて、またその向ふに山がある。

その時分、本間氏は四十近くの人であつたが、風變りの活潑な人なので、

「諸君かけつこをしよう」といはれた。皆ブン／＼走つた。すると、其の日遙々やつて来た大學生が一番に走せつた。

今度は、本間氏が道ばたの小石を拾つて、川の方に石を投げた。力は強いが投げ方が下手なのか、一生懸命に投げても川の向ふ岸までつかないで、ジョブんと石は川の中に落ちるのであつた。すると皆が石を拾つて投げ出した。その中に、大學生も石を拾つて投げたが、この人は學校でベースボールをよくやつて居たので、石はビュと飛んで、川を越え畑の向ふの方まで行つて勢よく落ちるのであつた。本間さんはそこをねらつて、

「君、君はさつき、労働は出来ないといはれたが、それは何のことです。かけつこすれば、人より早く、石を投げれば私の石より向ふまで勢よく飛んで行く。仲々の力持ちだ。私でもこんなつまらない力で、人五倍は働ける。すると私よりよつほど強い、君は、人十倍労働の出来ない事はない。それは出来ねえのではなくて、やらないのである」といはれると、大學生は、「ぢや働させよう」と出た。

悟れば何事も出来る。

忍耐の部でカーライルの話をしたらばそれを復習して初める。

それ以來大學生は、本間氏の家に泊りこんで、他の労働者と働くことになつた。

月末になつて、本間氏がその青年を呼んで「月末になつたから、今迄働いて頂いた賃金を勘定させよう。生活費を引去つて貰つて、残りがこれだけになります」といつて、相當の金を差し出されると、學生は是をじつと見て居たが、涙をハラ／＼流す。

「どうしたのか？」と尋ねると、

「先生、僕は實に只今思ひ當りました。僕は今迄放蕩ばかりして、親の金を費ひ果して居ましたが、これだけの金を稼ぎとるには、大變な骨折をしなければなりません。僕は今、金の價値をさとりました。もう僕は決して放蕩は致しませぬ」學生は斯う答へました。

その後此の學生は非常な勉強家となり、心がけも、行も一新して、大學を目出度優等で卒業したといふことです。

ある婦人とカーライル

カーライルは今から三十七八年前亡くなられた英國の文豪で、この人の書かれた文章は大變に人の心を激ます力が籠つて居る。

ある時、一婦人がカーライルに手紙をよこしたが、それには、

「私には、何のわけもなく、何時も心が不快で、どんなことをすれば本當なことか、間違つ

些事にも反省して心にスキなからしめる。油断するな。の教訓に結びつけて、目的とする。有

たことか分りませんで苦しんで居ますから、これから私のとつて行かなければならぬ道を教
て下さい」といふ意味のことが書いてあつた。カールは其の返事に、
「つまらない事を思ひ立ちなされるな。あなたの針箱の中には、亂れた糸は這入つて居ませぬ
か？ あつたらば、それをちやんと整理して絲巻に巻きつけて置きなさい。あなたの箆筒の
中には、取亂したまゝの着物がはいつて居ませぬか、あつたら綺麗にしまつて置きなさい。
若しあなたが、さういふことをキチンとして行かれたら、今の御心配も、疑問もはれてしま
ひます」と答へてやつたとのことだ。

私共はしなければならぬことを、小さなことだと思つて仕ないで、放つて置くと、それ
はやがて大きな心得違ひの基になつて、一生を誤ります。

私共はまた小さなことだと思つて、悪いことをすると、氣とがめがして氣持がよくありま
せん。それでも、その位なことが何かと思つて誤魔化して居ると、後には大きな悪事や、誤
らをして、自分は悪くないと、思つて身の禍となります。

だから私共は、小さなことでも忠實にやつて行かなければならぬのです。悪いと思つたら
すぐに悔い改めて、新たな心でよい行を勵んで行かねばなりません。

私共は自分の書物や道具を粗末に取扱つたり、着物を泥のついたまゝにしたり、手や足や

顔の汚れたのを其のまゝにしたり、自分の居間を取り亂して構はなかつたり、自分の履物を
自分で仕末せず、すべて自分のすべきことを自分でしないで居ると、決して善い人にはなれ
ません。

トルストイの勞働

今から十年も前亡くなつた露西亞の文豪トルストイは、日本と露西亞が戦争を始めますと
英國の新聞に長い論文をかいて、皇帝に向つて、こんな間違つた入道に逆いた戦争をしては
よくないといふことを云つた位の偉い人で、そんな大膽なことをいつても、誰一人トルスト
イを獄屋にぶら込むことは出来なかつたのです。

トルストイはそんなに偉かつたが、年五十になつても、何だか自分は人間の一番尊いこ
とを忘つて居るやうな氣がして安心が出来ず、ともすると考へ込んで苦しんで居ました。す
ると或る朝のこと、自分の部屋に女中が箆を持つて掃除に來ましたから、窓をあけて加勢を
したり、塵を拂つてやつたりしますと、急に心の中が明るくなつて、何か悟りを開いたやう
な嬉しい氣になりました。

そこでトルストイがつくづく思ひました、「成る程、自分は大きい家柄の御主人様だと濟し
込んで、何ごとにも手を引こめて、女中下男を顎使ひにして居ると、何だか氣がくさつて、

トルストイは
一八二八年に
産れ一九一〇
年に没す。

人間の尊いことを忘れて居るやうな苦しさがあるが、窓をあけたり、塵を拂つたりして、女中の手傳ひをしたばかりで、こんなに嬉しくなつた。人は他人を助けて労働をしなければならぬ。小さなことでも手を下してまめ／＼しく立働かねばならぬ。さうしなければ善い人はなれない」と。

それ以來トルストイは労働の神聖なことを益々感ずるやうになりまして、自分にも労働をし、人にも労働の大切なことを奨めてやつたのです。

世界歴史の話

日本人の覺悟

今から三千年以前、世界で一番開けて居た國に、埃及、バビロニヤ、印度の國々がありました。

埃及には、大變に學問が発達して居つたらしい。今日でも埃及を研究して居る學者は、埃及の開けて居たのに驚いて居る。今でも埃及にはいろ／＼不思議なものが残つて居る。一つはミイラといふもので何千年前の王様達の死んだ身體に薬をつけて目をあけさせ、腐らないやうに綺麗にして残してある。どんな薬かそれは解らない。一つはピラミットといふもので、

教授指針

世界文化史の極大略を授けて、日本人として、日本人と促がさうとするのが本篇の目的である。地圖を準備すべきこと。ピラミットの繪を準備すること。

これは三角の形に大きな石をつみ上げたもので、そのピラミット一つに使つてある石で日本の家をつくと三四萬の家が出来る位に大きい。一つは昔の宮殿の跡で、そこには何千年前かゝれた立派な繪が少しも繪の具の色が變らないで残つて居る。

何せよ、埃及人は崇高い大丈夫な精神を有つて居たことが解る。そしてまた醫學や數學の學問が大變盛んであつたことが確である。けれども埃及は後に外國と戰爭するやうになつてから亡んでしまつた。

□バビロニヤもまた開けた國で、丈夫な大きな建築や水道が立派に出来て居た。この國の王様や、人民は戰の準備ばかりして、「勝つたものが正しいものだ」といふ考を有つて、よく戰に勝つて居たが、とう／＼アッシリヤといふ隣りなる手下の國に亡ぼされた。

□印度も昔から開けて、こゝには文學やら哲學が盛んになり、後に名高い釋迦がお生れになつた。釋迦の教なる佛教は日本にも一千年ばかり前渡つて来て、よく信ぜられるやうになり、名高い坊さんが出られた。

□その後盛んになつた國は希臘であつた。希臘人は、愛國の心が深く、戰に強く、そして學問、美術が開けて、偉い人が澤山出て來た。聖人にソクラテスがあつた。政治家にソロンがあつた。フィデアスといふ美術家もあつた。希臘の特に發達して居たのは美しいことを

好んで居たことである。希臘の學問は三千年の後までも、世界中の國々を大變益したが、美術は猶更後世の模範となつて居るけれども希臘も戦争で負けて弱くなつた。

□希臘の次に興つた國は羅馬帝國であつて、昔から、こんな廣い領地をもつた勢力の盛んな國はなかつた。羅馬人は皆忠義で愛國心が強く、偉い英雄が幾人も出て來た。羅馬の政は大變よく整つた。けれども羅馬には學問が奮ひ起らず、おまけに殘虐な王様が出て來て戦ばかりあり、遂に亡びてしまつた。

□羅馬がまだ盛大であつた時分、ネロといふ悪い王様が居たが、むごたらしいことをして人民を苦しめた。その時分ユダヤといふ國に基督が現はれて、大變人々に感化を及ぼした。

希臘の美術と、羅馬の政と、ユダヤの基督教は、後世をつくり出した。

□支那も亦その頃、即ち二千二百年も前には偉い人達が澤山に居た。その中で最も名高い人は孔子、孟子、老子といふやうな人々であつた。その他戦大將に非常な豪傑や智者が澤山居た。孔孟の教は日本にもうつつて來て、明治以前即ち徳川時代には大變盛んにその道が講ぜられた。儒者といふのはその學者であつた。

支那にはこんな偉い人があつたばかりではなく、また世界で一番先に羅針儀や火薬をつくり出した國で、一度は歐洲でも攻めて行つた位に強國であつた。

シザルの話を復習す。

けれども支那人は昔の真似ばかりして新らしいことを工夫して行かなかつたから弱くなつた。

宗典コラン
(別の宗教)

□それから世界はちとろへ果て、立派な人も出ず、人民は苦しめられ、學問は退歩してしまつたが、その後になつて歐洲で夜があけるやうに勢力を示した人は、今から千三百年位前に生れたモハメットといふ人であつた。モハメットはアラビヤに産れた無學の商賣人であつたが、勇ましい征服的の教を開いて、人間は自分の流した血、自分が耐へ忍んだ苦痛によつてのみ神の恵みを受け樂園に移されるといふことを教へ、元氣のよいアラビヤ人を集めて、後には歐洲の國々を占領して大變な勢力になつた。

モハメットは無學者であつたけれども、モハメットを信ずる人達の間からは新らしい學問が発生して來た。

□さて、基督教徒の出たユダヤの國の都エルサレムには基督の墓があつたが、モハメット教徒がそこを占領すると、西歐洲の國々に住んで居た基督教徒は、その聖地を取戻さうとして、永い間モハメット教信者と戦争をした。

その時分には山や野は荒れて道もなく、勿論、汽車もなかつたから、國と國との交通といふことがなかつたが、その戦争で道が開け、國々の人々が互に交通するやうになつて、商賣

諸家の美術を
三色版にせし
ものを示せば
特によろし。

が盛んに起つて来た。田舎に町がいくつも出来て来た。
商賣が盛んになると、工業も盛んになり、學問美術も起つて来たが、その時分でも感心
することは、組合といふものが盛んに起つて、同職業の人達が互に助け合つたことである。
そのために永い間、夜のやうであつた歐洲には新しい光が輝き出て来た。
その新しい光は、先づ伊太利にともれた。伊太利に立派な人物がその時分澤山出て來
た。ダヴィンチ、やミケランゼロのやうな偉い美術家、ダンテのやうな大詩人はその時に
て來た人達で、さういふ人達の精神は當時の人に勇ましく眼を醒まさせた。それを文藝復興
と後の世の人が云つて居る。

伊太利人が眼をさまして、それがまた衰へかけた時には、佛蘭西、獨逸人にその光がまた
ともれた。特に獨逸人は元氣がよかつたので、ゑらい人が出て來た。その中で一番エラかつ
た人はルイテルである。

その時分には基督教の僧侶が王様よりも勢力があつて、吾がまゝをして、人民を苦しめて
居たので、ルイテルは一人で僧侶の頭法王に反對して、その考へや行の悪しきことを責めた。

□けれど、また暫らくすると、一時ともれた文藝復興の光が消えて、二百年位の間は基督
教の法王や、その手下の僧侶が吾がまゝをして人民を苦しめ、また貴族が多くの土地財産を

ルイテルが法
王の前に立つ
て居る繪を準
備すれば特に
よろし。

ガリレオは天
體地球の圓形
なることを呼
ばれた。その
罪に處せられ
死刑にせられ
た。死にかけ
られたから一
つて法王とい
つては赤い舌
を出して見せ
た。

ナポレオンの
肖像その他を
準備したし。

もつて下々の人を壓して居たから、學問は衰へ、苦しい聲ばかりが聞えて居た。

たまたに學問上の発見をした人があると、殺されたり、獄に入れられたりして居た。何故か
といふに、さういふ學問が開けると、坊さん達は自分たちの考への間違つて居ることがわか
つてこわくなるからであつた。

□ところが、人々はそんな苦しい理のわからぬことに何時までも辛抱の出来るものではな
い。人は各々自分の天分に産れついで居る。そこで今から百五十年も前、佛國革命といつて、
吾が儘極まる坊さんや貴族に反抗して、下々人民に權利を與へよ、下々人民が安心して暮し
の出来るやうにせよと叫び、人民の不幸を來すところの、大金持、貴族、僧侶を征伐して新
らしい國を樹てようと言ひました。さういふ革命を起した人の中で、最もゑらかつた人は
ヴォルテルといふ人と、ルッソウといふ文學者でした。

佛國革命は人間の知識をおしよめる原因にはなつたが、思つたやうな新しい國をたて
ることは出来ずに、今度はナポレオンといふ豪傑が出て來て世界中を吾がものにしてしま
うと思ひ、殆んで歐洲中を平げたが、最後に露西亞に攻めに行つて負けて、思ひ立が破れて
しまひました。

□佛國革命以後は、科學文學と共に工業商業、美術音樂が盛んになつて、世界の知識がど

んく、開け、偉い人が出て世の中を導き、國を強くしました。

その間に英國からアメリカに植民に行つて居た人達は、アメリカ合衆國をつくりあげて國を開きましたもので、世界では英國、米國、獨逸、佛蘭西といふやうな國々が大變に開けた。

學問が開けると、人民の權利が尊ばれるやうになつて、坊さん達は吾がまゝが出来なくなり、ユラければ誰でも天下の政をされるやうになりました。

□世の中が開けると、國にはどうしても金がある。貧乏では國が成り立たない。

そこで英國のやうな國はアフリカをとつて金剛石をとるやら、又濠洲に事業を起すやら、印度をとるやら、人情にそむくことをしても、自分の儲けになることをするやうになつた。

アメリカでは、昔モンロウといふ立派な大統領が居て、外國とは戦はないというて居たが、後には、さういふわけに行かなくなり、布哇を占領したり、東洋人をはねのけたりして、一圖に自分の利益を計るやうになりました。

獨逸は佛蘭西と戦つてまけた残念さに堪らず、一國の國民が一致して奮發し學問を盛んにし、儉約をして英國産のものを少しも買はずに、自分の國で出来たもので需用に供して居たものだから、學問が僅か數十年の間に驚く程進歩して全世界の上にそびえたが、英國では獨逸を大變憎んで居た。

以上はどんなに詳しく説明してもよろしい、只このいはその大體の方向を示したのに過ぎない。

□獨逸はさうして國力を養つて、大正三年に世界を相手に戦争を始め、激しい戦をして一時は大變勝つて居たが、大正七年の終りになつて、急に勢力がなくなり、佛蘭西で講和談判が開かれた。戦敗した獨逸の皇帝は皇位をやめて、獨逸は今王國から共和國になつて居ます。

□今後の世界の國々は、金儲けの競争をして行かうといふのです。講和會議の後にはどうなるかまだよく分りませんが、英國はアフリカの南から北へと鐵道を布き、それから又印度へと鐵道を布いて、亞弗利加、印度の富を、吾がものにしようとして居ます。アメリカは亞細亞の方にどしどし手をのべて、あのシベリヤまで、大金儲けの事業を興さうとして居ます。世界の國々は金の欲しさに一生懸命になつて居ます。

この時に當つて、諸君日本の少年は大覺悟をしなければなりません。諸君は何處の國の國民よりも勇ましい精神と、國を愛するまごゝろを以つて、眞剣な働きをする人にならなければなりません。諸君は丈夫な身體と、ものに屈しない金剛力を以つて、諸君の欲するところに向つてドシドシ進んで行く人にならなければなりません。諸君は正義に立ち、國を強くする英雄であることを思つて、どんなつらいことにも勇ましく耐へ忍んで働いて行かねばなりません。學問をしようと思つて、仕事をしようと思つて、仕事は何でもいゝから、諸君が自分の心に導ねて

やらければならぬと思ふことを、勇ましくやつて行きなさい。
 日本人の精神が世界で一番立派で、日本人の行ひが世界で一番勇ましかつたら、日本は世
 界中で一番強い國として立つて行くのです。努々そのことを忘れないうで、面目を保つて行か
 ねばなりません。

修身教授資料集成 終

大正八年六月十日印刷
 大正八年六月十六日發行

(修身教授資料集成)
 (定價金 參圓)



發兌元

東京市京橋區南鍋町一丁目
 振替口座東京八五三番

隆文館圖書株式會社

(電話新橋一七八〇番)

編著者
 編著者
 發行者

三浦 關 造
 川 島 次 郎

隆文館圖書株式會社

右代表者 松岡 達

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

印刷者

佐久間 衡 治

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所

株式會社秀英舍

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

兩性折衝
の秘密を
窺ふ關鍵

△下等動物より人類に到る迄進化的に性慾を研究したる權威的の著述
△凡ゆる種類の動物に涉りて性的習癖を觀察し珍奇なる行爲を紹介す！
△母權と父權の興廢消長の跡を性的に究明して其の根本的斷案を下す！

回ウイルヘルム・ベルシエ原著

【版再】

性的進化論講話

洋裝布綴箱入
紙數四百餘頁
四六判頗美本
定價圓四拾錢
郵費金八錢

回文學士 本田親二先生 翻譯

男女問題
に鐵案を
下す名著

△一夫一婦主義と一夫多妻主義及多夫一妻主義の起りし所以を説く！
△貞操の意義如何、賣淫の歴史如何、婚姻關係家庭生活の變遷如何！
△此等人道の根柢に横はる深酷なる問題も悉く平明的確に説述せられたり！

米國教育學博士 西山哲治先生著

自學主義各科教授原論

歡迎
激甚

菊判紙數四八〇頁總洋布綴箱入美本

劃一主義の教育、形式一逼の教育に慊ら
す思ふ若き教師諸君よ、諸君の胸奥に漲
つて居る湧きたる新理想に呼應適合する
教育原論の本書の中を讀んで頂きたい。
現代教育の通弊を剔抉して此程痛快に極
めた書は絶無である。著者は多年海外に
在つて斯學の蘊奥を極た上、現に帝國小
學校を經營して學身的努力をして居る人
であるから斬新の學說と精細の經驗とを
織つて片言隻句の末迄傾聽推服に足る。

定價金貳圓五拾錢 送料金拾貳錢

(時事新報日)

最近の教法には從來の注入主義と異れ
る新法多々あり曰く開放主義曰く活動
主義曰く興味尊重主義曰く何か其の
中の執れも生徒の實力を描出するに
効無き事洵に汗顔に慙えざる也著者茲
に看る處あり曾て最近の米國に於て習
得せる新知識と一方歸朝後帝國小學校
に於て獲たる訓育上の實驗とを併ばせ
論じ新たに「兒童中心主義」の自學的訓
育法を提唱せる事は將に吾が教育界
に取りては空谷の足音たるの感なくん
ばあらず教育に關係ある諸氏は何事な
ぞ先づ本書を讀まざる可からず

東京高等師範教授 樋口長市先生 閱 大阪女子師範教諭 三橋節先生 著

女教師の爲に

菊判 四六〇
布製箱入 頗美本
金貳圓五拾錢
送料 金拾貳錢

女教師問題は、今や漸く本邦教育界の痛切なる實際問題として擡頭し來らんとす。此時に當り、三橋先生の多年の経験と、樋口先生の研究と、對する世評の妄を破ると同時に、其可否に關する問題の明かにし、進んで教授訓練に於ける女教師の用意と心得とを仔細に述べられたり。樋口高等師範教授の校閱並に推薦は、旁以て本書の價値に一段數段を加ふるものと云ふべし。本書は、獨り女教師に限らず、世の一般教育家及教育行政家の一讀を望まざるべからず。

東京朝日新聞曰く、著者が現今の我が教育界に對して抱ける不滿、就中女教師の公人的態度、其研究的努力、其の教育者としての能率程度に於て、嫌らざる節多く、同時に女教師増加の時運を鑑み、其短所を起し、其修養を説き、進んで教授訓練、養護の問題を論じ、更に高年女教師の訓練、作法、家事の教授、手藝教育等に就き、教育の全局に着眼して時弊を穿ち、堅實なる研究的態度を以て極めて實際的に叙述したり。

東京府立第一高等女學校校長 市川源三先生 著

乳兒の教育

中判 布製箱入
ポイント 假名附
美麗三色 版口繪
金壹圓 送料六錢

教育は學齡時に始まるものに非ず、寧ろ母懷に在て乳房に縋る乳兒の時代に母親は早く其子の教育に心せざるべからず。殊に品性を形造る感情、意志の習慣は、夙に乳兒期に於ける母親の仕向方に依て定るといふ。此意味にて教育上乳兒の教育を最も重大とす。有名なる女子教育者市川先生、今其實地經驗に基いて本書を公にし、此種の著書の先鞭を着けらる、幸に世の教育熱心の母親の一讀を給はらば、獨り吾等の欣幸のみならず也。

初版忽ち賣切れ 再版出來

●ルツソー原著 三浦關造先生譯

■十九版■

縮刷 エミール

ボケツト形
洋装ソフト
八百數十頁
金壹圓五十錢
送料金八錢

ルツソーは近代思想の父也。而してエミールは其の代表的著作也。「自然に還れ」の一語を標榜して虚飾と情實に化石したる當年フランス社會の病弊を剔抉し、新教育法を提唱す。幼時期、官覺的教育、智的教育、道德宗教々々、女子教育の五項に分ちて、形式を小説に假りたれば興味津津の裡に讀了し得べし。佛國大革命の赤色旗之に淵源して綴り、アメリカ獨立の烟塵之に胚胎して騰る。筆の力も亦偉ならずや。

■ ■ ■
枯死せる教育方法及制度に對する
反抗と革命の焰々たる鋒火を見よ

晉に遠く歐米の歴史を討究するに不及、彼が烈々噴火の如き眞精神は吾邦思想界にも大旋渦を捲起したり。「民約論」移植せられて明治初年の民権運動となり、「懺悔録」の譯成りて文藝の新主張起りぬ。而して茲に本館「エミール」の譯を出版するや甚大なる歡迎を受けて教育界に強烈なる新刺戟を與へしは、夙に識者の認知する所也。重版又重版、今や原版廢滅して新たに縮刷なりぬ。敢て大方の讀書子にすむ。

キルヘルム・フツセツト著
文學士 大川周明先生譯

宗教の本質

文學博士 加藤玄智先生著

再版

宗教は人類の精神的生活に於て最も力あり、最も意義ある一大事實にして、本書は即ちこの人類社會の一大現象として、宗教の發生、發達とこれが藝術、民族に對する交渉、近代生活及び近代文明との關係を最も平易明快に論述せるもの也。

金壹圓拾錢 送料八錢

宗教講話

文學博士 松本文三郎先生著

四版

宗教の種類、信仰の起原、迷信と宗教、迷信の起原、迷信の本質、宗教の定義、多神教と一神教反對論者の非難等一切の題目を提し來つて、宗教の根本的意義と信仰の絕對價值を明らかにし、更に進んで宗教と學術の一致、宗教と道徳の調和、宗教と教育の關係等、幾々數へて徹む所なし。

金九圓拾錢 送料八錢

宗教と學術

文學博士 松本文三郎先生著

再版

松本文學博士は曩に京都帝國大學文科大學長たり。識見卓絶且つ人格者として天下の仰ぐ所、希くは本書を通じて此の寡言沈黙の人に接せよ。

金壹圓拾錢 送料八錢

類書考參育教

三浦關造先生著	最新體操集成	送金四圓三十錢
尼子吉原・眞行寺著	最新遊戲集成	送金四圓八拾錢
三浦關造先生著	小學教師のトルストイ	送金四圓二十四錢
文學士淺山尚先生著	綴方教授の破壊と建設	送金壹圓十二錢
大川義行先生著	初學年兒童訓練法と假名教授眞實	送金壹圓六拾錢
阪田閣藏先生合著	教科本位實驗的算術教授法	送金壹圓六拾錢
時本要先生著	小學學校農業科新教授細目	送金壹圓八拾錢
奧井平七先生著	小學學校農業教授の實際	送金壹圓八拾錢
成田軍平先生共著	小學校地理教授の實際	送金貳圓八拾錢
角田政治先生共著	小學校歷史教授及教材の研究	送金貳圓五拾錢
青木武助先生共著		送金貳圓八拾錢

類書想思・育教

三浦關造先生著	女教師の爲に	送金貳圓五拾錢
東京第一高女校長著	乳兒の教育	送金拾壹圓
米國教育博士著	自學主義各科教授原論	送金貳圓五拾錢
高橋純一先生著	最新地文地理集成	送金貳圓八拾錢
東京女高師訓導長著	修身教授資料集成	送金壹圓八拾錢
川島次郎先生著	手工教授資料集成	送金壹圓八拾錢
手工教授研究會編	理科教授資料集成	送金壹圓八拾錢
文學士坂本健一先生著	西洋歷史集成中卷	送金壹圓八拾錢
江部鴨村先生著	貧者の一燈	送金壹圓八拾錢
東京高師教授	愛の躰けと愛兒の教育	送金壹圓五拾錢

宗 教 哲 學 史 歷

桑木殿異先生著	朝永三十郎先生著	松本文三郎先生著	加藤玄智先生著	大川周明先生著	坂本健一先生著	坂本健一先生著	坂本健一先生著	大島居弁三先生著	絶谷天尊先生著
時 代	哲 學	宗 教	宗 教	宗 教	世 界	羅 馬	羅 馬	世 界	教 育
と	と	と	講 話	の 本 質	最 古 史	盛 衰 史	中 興 史	諸 人 種	勅 語 と 宗 教
送金 壹圓 參拾 八錢	送金 壹圓 參拾 貳錢	送金 壹圓 參拾 貳錢	送金 九拾 貳錢	送金 壹圓 拾 貳錢	送金 貳圓 五拾 錢	送金 貳圓 四拾 錢	送金 六拾 貳錢	送金 五拾 貳錢	送金 五拾 貳錢

終

